

クビリ遺跡
有田塚ヶ原遺跡

2005年

日田市教育委員会



クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡遠景（東から）

序 文

大分県日田市は周囲を1,000m級の山々に囲まれた小さな盆地に市街地が広がり、市域の85%を林野が占める山間都市です。その地形的特性を生かした林業が盛んな地域で、「日田杉」という一大ブランドを創り出しました。

しかし90年代初頭のバブル崩壊の波を受けてこの基幹産業も危機に立たされたため、打開策としてウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）が計画され、工事が始まり、現在は日田の木材の集積地として機能を果たしております。本書はこのウッドコンビナート建設事業に伴って発掘調査を実施した有田塚ヶ原遺跡群のうち、クビリ遺跡および有田塚ヶ原遺跡の調査内容をまとめたものです。

クビリ遺跡の調査では古代に鍛冶を行ったであろう痕跡が、また有田塚ヶ原遺跡の調査では縄文時代の人々が狩りを行うために獣道に設けた落とし穴群や、並ぶように配置された古代の建物跡が発見され、往時の生活の様子が垣間見える、貴重な資料となりました。

本書が、文化財の保護や地域の歴史などの普及啓発に、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました市林政課や地権者の方々、調査中にご支援を賜りました大分県文化課の職員の方々、ならびに作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月

日田市教育委員会

教育長 諫山康雄

例 言

1. 本書は、市林政課が計画・実施したウッドコンビナート建設推進事業に伴い、平成6年度～9年度に市教育委員会が実施した有田塚ヶ原遺跡群発掘調査のうち、平成7年度に実施したクビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡の発掘調査報告書であり、「ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2」とする。
2. 調査にあたっては、市林政課、工事関係者および地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
3. 調査現場での個別遺構及び土層図の実測は調査担当者のほか、森山敬一郎・荏隈典子・財津真弓が行い、全体測量及び実測は(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
4. 本書に掲載した遺物実測は担当者が行い、遺構・遺物の製図は担当者のほか藤野美音(調査補助員)が行った。
5. 空中写真撮影については(株)スカイサーベイに委託し、本書にはその成果品を使用した。
6. 遺物の写真撮影は(有)雅企画長谷川正美氏に委託し、その成果品を使用した。
7. クビリ遺跡から出土した鉄滓の分析は(株)九州テクノリサーチに委託し、成果品をいただいたが、長迫遺跡分と合わせて後日分析編として報告する。なお、まとめの中では、遺跡の性格上からその成果については一部触れさせていただいていることをお断りしたい。また有田塚ヶ原遺跡群の石ヶ迫遺跡B地区(報告書既刊)で実施したプラント・オパール分析の報告を本冊子に掲載する予定であったが、これも分析編のなかで報告する予定である。
8. 挿図中の方位および文中の方位角はすべて真北である。
9. 写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆は行時桂子が行い、編集は土居と協議の上、行時桂子が行った。



日田市の位置

本文目次

第1章 はじめに

- 第1節 調査にいたる経過と調査組織 1
- 第2節 遺跡の立地と環境 3

第2章 クビリ遺跡

- 第1節 調査の経過 5
- 第2節 調査の内容 6
 - 1. 調査の概要 6
 - 2. 遺構と遺物 6
 - 1) 溝 / 2) 柱穴群 / 3) 包含層
- 第3節 調査のまとめ 15
 - 1. 遺構等の時期について 15
 - 2. 遺跡の性格について 15

第3章 有田塚ヶ原遺跡

- 第1節 調査の経過 23
- 第2節 調査の内容 24
 - 1. 調査の概要 24
 - 2. 遺構と遺物 24
 - 1) 掘立柱建物跡 / 2) 土坑
- 第3節 調査のまとめ 44
 - 1. 掘立柱建物跡の時期と性格について 44
 - 2. 土坑の時期と性格について 44

挿 図 目 次

(第1章 はじめに)

- 第1図 ウッドコンビナート計画位置図 (1/15,000) 1
- 第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000) 4

(第2章 クビリ遺跡)

- 第3図 有田塚ヶ原遺跡群調査遺跡位置図 (1/10,000) 5
- 第4図 クビリ遺跡位置図 (1/4,000) 6
- 第5図 クビリ遺跡遺構配置図 (1/400) 7
- 第6図 調査区土層図 (1/80) 8
- 第7図 1号溝出土遺物実測図 (1/3) 9
- 第8図 包含層3層床面遺構・遺物分布図 (1/200) 9
- 第9図 包含層上層出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)10
- 第10図 包含層下層出土遺物実測図① (1/3・1/4)12
- 第11図 包含層下層出土遺物実測図② (1/4)13
- 第12図 包含層下層出土遺物実測図③ (1/2)14

(第3章 有田塚ヶ原遺跡)

- 第13図 有田塚ヶ原遺跡群調査遺跡位置図 (1/10,000)23
- 第14図 有田塚ヶ原遺跡位置図 (1/4,000)24
- 第15図 有田塚ヶ原遺跡遺構配置図 (1/600)25~26
- 第16図 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)28
- 第17図 3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)29
- 第18図 5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)30
- 第19図 1~7号土坑実測図 (1/40)32
- 第20図 8~16号土坑実測図 (1/40)34
- 第21図 17~24号土坑実測図 (1/40)36
- 第22図 25~29号土坑実測図 (1/40)38
- 第23図 30~36号土坑実測図 (1/40)40
- 第24図 37~42号土坑実測図 (1/40)41
- 第25図 43~48号土坑実測図 (1/40)43
- 第26図 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)43
- 第27図 落とし穴遺構分布図 (1/2,000)45

表 目 次

(第1章 はじめに)

第1表 ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および 関連文献表	2
---	---

(第2章 クビリ遺跡)

第2表 クビリ遺跡出土土器観察表①	17
第3表 クビリ遺跡出土土器観察表②	18
第4表 クビリ遺跡出土土製品観察表	18
第5表 クビリ遺跡出土鉄製品観察表	18
第6表 クビリ遺跡出土石製品観察表	18

(第3章 有田塚ヶ原遺跡)

第7表 有田塚ヶ原遺跡出土土器観察表	46
第8表 有田塚ヶ原遺跡出土石器観察表	46

挿 入 写 真 目 次

写真1 クビリ遺跡作業風景	
写真2 ウッドコンビナート用地遠景	
写真3 クビリ遺跡試掘調査風景	
写真4 有田塚ヶ原遺跡試掘調査風景	
写真5 クビリ遺跡全景	
写真6 有田塚ヶ原遺跡全景	

写真図版目次

巻頭写真図版 クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡遠景（東から）

（第2章 クビリ遺跡）

図版1 全景／全景

図版2 1号溝完掘状況／掘下げ状況／A-A'土層／焼土検出状況
遺物出土状況①～④

図版3 出土遺物

図版4 出土遺物

（第3章 有田塚ヶ原遺跡）

図版5 全景／北側全景

図版6 南側全景／建物群全景

図版7 1～8号土坑

図版8 9～16号土坑

図版9 17～24号土坑

図版10 25～32号土坑

図版11 33～35、37～41号土坑

図版12 43・44・46・48号土坑／出土遺物



写真1 クビリ遺跡作業風景

第1章 はじめに



写真2 ウッドコンビナート用地遠景

第1節 調査にいたる経過と調査組織

クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡はウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）建設地内で確認された遺跡である。

ウッドコンビナートは、日田市の基幹産業である林業の長期不況等の諸問題を打開し、また大分県が県西部の林業・木材産業の活性化を目指し策定したグリーンポリス構想に基づき、木材供給基地として日田市に計画されたもので、平成5年度には日田市役所内にウッドコンビナート推進室が設置され、平成7年度から平成10年度までの4年間で第1期とする開発面積677,315㎡もの広大な建設工事が進められることとなった。

この工事着手に先立ち、平成6年度より現地の分布調査および試掘調査を実施し、7ヶ所で遺跡の存在が確認されたことから、これらの取扱いについて事業主体であるウッドコンビナート推進室と協議を行った。その結果これらは有田塚ヶ原遺跡群として、用地買収や樹木の伐採が終了した場所から随時発掘調査を行うこととなった。平成7年2月からの平島横穴墓群の調査に始まり、石ヶ迫遺跡A・B地区、クビリ遺跡、有田塚ヶ原遺跡、祇園原遺跡、尾漕2号墳、長迫遺跡の順に進め、平成9年7月には尾漕2号墳と長迫遺跡の調査終了をもって現地でのすべての作業を完了した。その後、平成7年度から14年度まで整理作業を行い、整理作業が終了した平成15年度から調査報告書を継続的に発行する運びとなった。



第1図 ウッドコンビナート計画位置図 (1/15,000)

なお、クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡の調査組織については既刊行の『石ヶ迫遺跡』ですでにまとめて報告しており、ここでは平成16年度の報告書作成に関する組織構成のみを記す。

平成16年度調査組織

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査事務 後藤 清（同文化課長）、高倉隆人（同課長補佐兼埋蔵文化財係長）、
伊藤京子（同副主幹）

報告書担当 行時桂子（同主任）

また、有田塚ヶ原遺跡群として調査を行った遺跡およびその関連文献については、下記の表のとおりである。

第1表 ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および関連文献表

遺 跡 名	調 査 年 度	関 連 文 献 名	報 告 書
平島横穴墓群	平成6～7年度	行時志郎他/「6 平島横穴墓群」『平成6年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1996年 行時志郎他/「2 平島横穴墓群（HSY）」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	未報告
石ヶ迫遺跡A・B地区	平成7年度	行時桂子/『石ヶ迫遺跡』/日田市教育委員会/2004年 松下桂子/「4 石ヶ迫遺跡（ISG）」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	報告済
クビリ遺跡	平成7年度	行時志郎他/「6 クビリ遺跡（KBR）」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	本報告
有田塚ヶ原遺跡	平成7年度	行時志郎他/「9 有田塚ヶ原遺跡（ATH）」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	本報告
祇園原遺跡	平成7～8年度	行時志郎他/「10 祇園原遺跡（GOB）」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年 行時志郎他/「1 祇園原遺跡（GOB）」『平成8年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年	未報告
尾漕2号墳	平成8～9年度	行時志郎他/「5 尾漕2号墳（OKG-2）」『平成8年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他/「1 尾漕2号墳（OKG-2）」『平成9年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年	未報告
長迫遺跡A・B地点	平成8～9年度	行時志郎/「7 長迫遺跡（NSK）」『平成8年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他/「2 長迫遺跡A・B地点（NSK-A・B）」『平成9年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年	未報告
有田塚ヶ原遺跡群全般	-	『有田塚ヶ原遺跡群』（概要報告）/日田市教育委員会/1999年	-



写真3 クビリ遺跡試掘調査風景



写真4 有田塚ヶ原遺跡試掘調査風景

第2節 遺跡の立地と環境

大分県西部、筑後川上流域に位置する日田市は、標高80m前後の沖積地に広がる市街地の周囲を標高約150mの阿蘇溶岩台地が巡り、その外周に標高200～600mの耶馬溪溶岩台地が、市の境界域には700～1,000m級の山々が連なって盆地の景観を形成する。この山々を源とする大小の河川は溶岩台地の合間を縫って沖積地へ流れ込み、南流する花月川や西流する玖珠川などが合流して筑後川となり有明海へ注ぐ。

クビリ遺跡および有田塚ヶ原遺跡のある有田塚ヶ原遺跡群は盆地東部の大字東有田に位置し、花月川支流の有田川と求来里川が合流する東側に立地する。このあたりは市街地から離れ、近世期日田盆地が江戸幕府の直轄地であった頃、東隣の玖珠・森藩領となっていた地域である。有田塚ヶ原遺跡群の各遺跡は阿蘇溶岩台地を中心に立地し、全体的には急な斜面が多く見られる。このような立地条件は盆地周辺部によく見られ、台地上には古墳が造られ、谷部や小沖積地には集落跡が広がっている。クビリ遺跡はこのような地勢の緩斜面に、有田塚ヶ原遺跡は丘陵上に営まれている。

この有田塚ヶ原遺跡群では本報告のほかに、鉄器や装身具類など多数の副葬品が出土した大規模な墓地・平島横穴墓群（22）、縄文時代早期の集石や竪穴住居・掘立柱建物で構成される古代の集落跡などが見つかった石ヶ迫遺跡A・B地区（20・21）、弥生時代中～後期の集落跡で大型の掘立柱建物や棟持柱建物を擁する祇園原遺跡（11）、箱式石棺墓2基を主体部とする円墳・尾漕2号墳（16）、古墳時代と奈良時代の大集落である長迫遺跡A・B区（15）が調査されており、順次報告を行っているところである。

また有田塚ヶ原遺跡群の周辺ではほ場整備などの開発に伴う発掘調査が数多く実施されている。まず求来里川流域では弥生～古墳時代、中近世の集落や大量の銭貨を副葬する中世墓が発見された尾漕遺跡（12～14、18）縄文時代晩期の埋甕などが発見された森ノ元遺跡（27）、古墳時代の集落跡や古代の土壇墓が確認された馬形遺跡（28）、円墳3基で構成される中尾古墳群（5）がある。上流域では求来里平島遺跡（30）や町ノ坪遺跡（31）、金田遺跡（32）など広範囲にわたって弥生時代～近世の集落跡や溝などが見つかっており、なかでも求来里平島遺跡や町ノ坪遺跡ではカマドの初現期にあたる時期の竪穴住居跡や初期須恵器が発見され、日田市では資料の乏しい古墳時代中期の様相が明らかになりつつある。

有田川流域に目を転じると、単室両袖式の横穴石室を主体部とする円墳・塔ノ本古墳（8）、市史跡指定を受け保存されている円墳・平島古墳（9）、弥生時代後期の環濠集落と古墳時代後期の集落が発掘された平島遺跡（7・10）、5世紀の前方後円墳と考えられる城山古墳（26）など古墳時代の遺跡が分布しており、下流には古墳～古代の集落跡である大行事遺跡（1）、弥生時代と古代の集落や墓が発見された内ノ下遺跡（2）、古代の集落や墓が発見された川原田遺跡（3）、弥生時代の集落や墳墓が発見された佐寺原遺跡（4）などが位置する。

このほか、遺跡の西方には中世大蔵氏の関連施設とされる慈眼山瀬戸口遺跡（34）、縄文～中世の生活痕が発見された赤迫遺跡（36）、奈良時代の墨書土器が発見された大波羅遺跡（37）、直径約35mを測る円墳・薬師堂山古墳（39）、装飾古墳1基を含む法恩寺山古墳群（41）などがある。

《参考文献》

千田 昇「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』大分大学教育学部 1992
 行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』日田市教育委員会 1999

田中裕介他編『小迫辻原遺跡Ⅰ A・B・C・D区編』大分県教育委員会 1999

※ 町ノ坪遺跡・金田遺跡については調査担当者よりご教示いただいた。



- | | | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1 大行塚遺跡 | 8 塔ノ本古墳 | 15 長迫遺跡A～C区 | 22 平島覆穴墓群 | 29 元宮遺跡 | 36 丸尾神社古墳 |
| 2 内ノ下遺跡 | 9 平島古墳 | 16 尾瀬2号墳 | 23 クビリ遺跡 | 30 求采坐平島遺跡 | 37 藤御堂山古墳 |
| 3 川原田遺跡 | 10 平島遺跡A～C区 | 17 長迫遺跡D区 | 24 有田塚ヶ原遺跡 | 31 町野原遺跡 | 38 北向古墳 |
| 4 佐寺原遺跡 | 11 花岡原遺跡 | 18 尾瀬遺跡1次 | 25 塚ヶ原古墳群 | 32 惣隈山瀬戸口遺跡 | 39 延恩寺古墳群 |
| 5 中尾古墳群 | 12 尾瀬遺跡5次 | 19 尾瀬古墳 | 26 嶺山古墳 | 33 丸山古墳 | |
| 6 中尾原遺跡 | 13 尾瀬遺跡4次 | 20 石ヶ迫遺跡A地区 | 27 藤ノ元遺跡 | 34 赤迫遺跡 | |
| 7 平島遺跡D-E区 | 14 尾瀬遺跡2次 | 21 石ヶ迫遺跡B地区 | 28 黒形遺跡 | 35 大波屋遺跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

第2章 クビリ遺跡



写真5 クビリ遺跡全景（東から）

第1節 調査の経過

クビリ遺跡は、有田塚ヶ原遺跡の所在する丘陵の侵食が進んだ結果できた急峻な谷の中に営まれている。このため遺跡の周囲は切り立った崖に囲まれ、唯一石ヶ迫遺跡の立地する北に向かって開けていた。この谷の入口部分は狭く、遺跡の一角のみが袋状に広がっていた。調査前の土地利用状況は谷一帯が杉林で覆われていたが、かつては畑作が行われていた様子が窺えた。

クビリ遺跡は試掘調査で土師器や須恵器をはじめとする多くの遺物が出土するとともにピットなどの遺構も多数検出されたことから、発掘調査は遺構や遺物が集中して出土した谷中央部分一帯を調査対象区域として設定した。杉林の伐採・搬出が完了した後、バックホウで表土を除去し遺構検出作業に移っていった。次節で詳しく説明を加えるが、表土を除去した段階で柱穴が多数検出された面の下から遺物包含層が確認されたため、この面での遺構の掘り下げ完了後は包含層の調査に移っていった。

本遺跡の調査対象面積は約1,500㎡で、調査は平成8年1月11日から3月28日まで行った。調査の経過等の概要については、以下のとおりである。

平成7年度

平成8年1月11日 表土除去を始める。(～29日)

1月22日 遺構検出を始める。

2月5日 遺構実測を始める。

3月16日 空中写真撮影を行う。

3月28日 調査作業を完了する。

また平成10年度には出土した鉄滓の分析の委託を行った。



第3図 有田塚ヶ原遺跡群調査遺跡位置図(1/10,000)

第2節 調査の内容

1. 調査の概要

クビリ遺跡の北側は、石ヶ迫遺跡の立地する谷部が広がっている。本遺跡の調査前に石ヶ迫遺跡の発掘調査ではすでに古代の遺構が多数確認されていたため、本遺跡においても試掘調査結果から同時期の遺構の広がりをおぼろげに推察することが予想された。

調査では、表土除去後の遺構検出段階で調査区西北端で溝が1条検出された他、調査区西側中央付近でも溝1条と柱穴群が確認された。しかし、これらの遺構群が掘り込まれた土の中からも遺物が出土したことから、さらにその下に時期の異なる遺構の存在する可能性が想定されたため、トレンチを設定してその確認を行うことにした。トレンチ調査の結果、第6図の土層図に示す層のうち、1～3層までの各層から遺物が出土した。このことから、当初検出された柱穴等の遺構を完掘した後に、その下に広がる遺物包含層を各層ごとに分けて全体的な掘り下げを行うと同時にその面での遺構検出作業を進めていった。1～2層においては、遺物の出土も少量に留まり遺構も確認できなかったが、3層からは多量の遺物が出土するとともにこの層の床面からは第8図に示すように焼土面や柱穴等の遺構もわずかながら確認された。そこで、この層における遺物の出土位置と焼土面等も合わせて記録することとした。なお、4層以下からは遺物の出土もなく、岩盤の風化礫を含んだ黄褐色の粘土質の土が広く何層かにわたって堆積していた状況から、4層以下の層は自然堆積層の地山と判断し、掘り下げは3層までにとどめて調査を終了した。

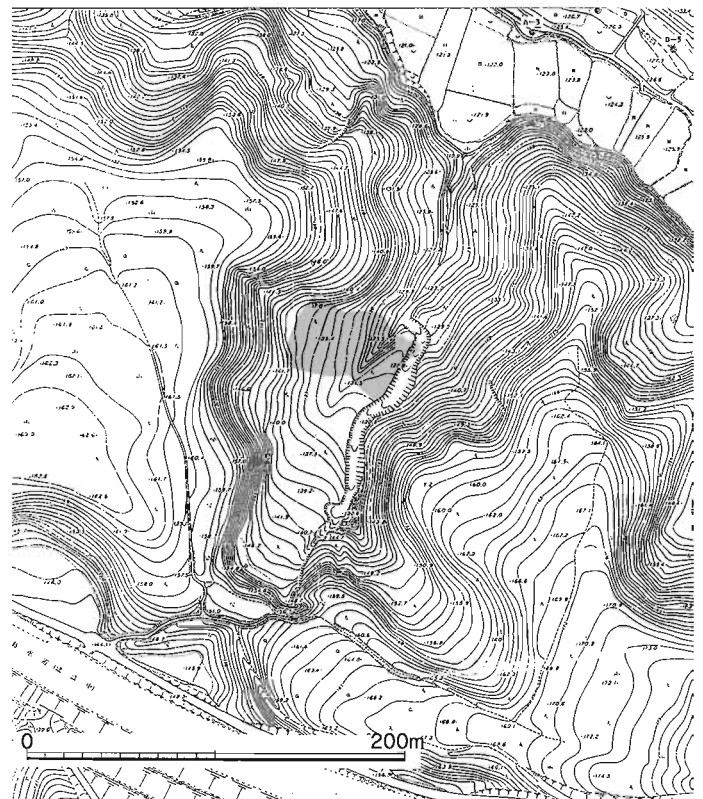
2. 遺構と遺物

遺構としては、当初の遺構検出面で溝2条、柱穴群が検出された。また、その遺構下の包含層3層最下部から焼土面や柱穴が検出された。以下各遺構ごとに説明を加える。

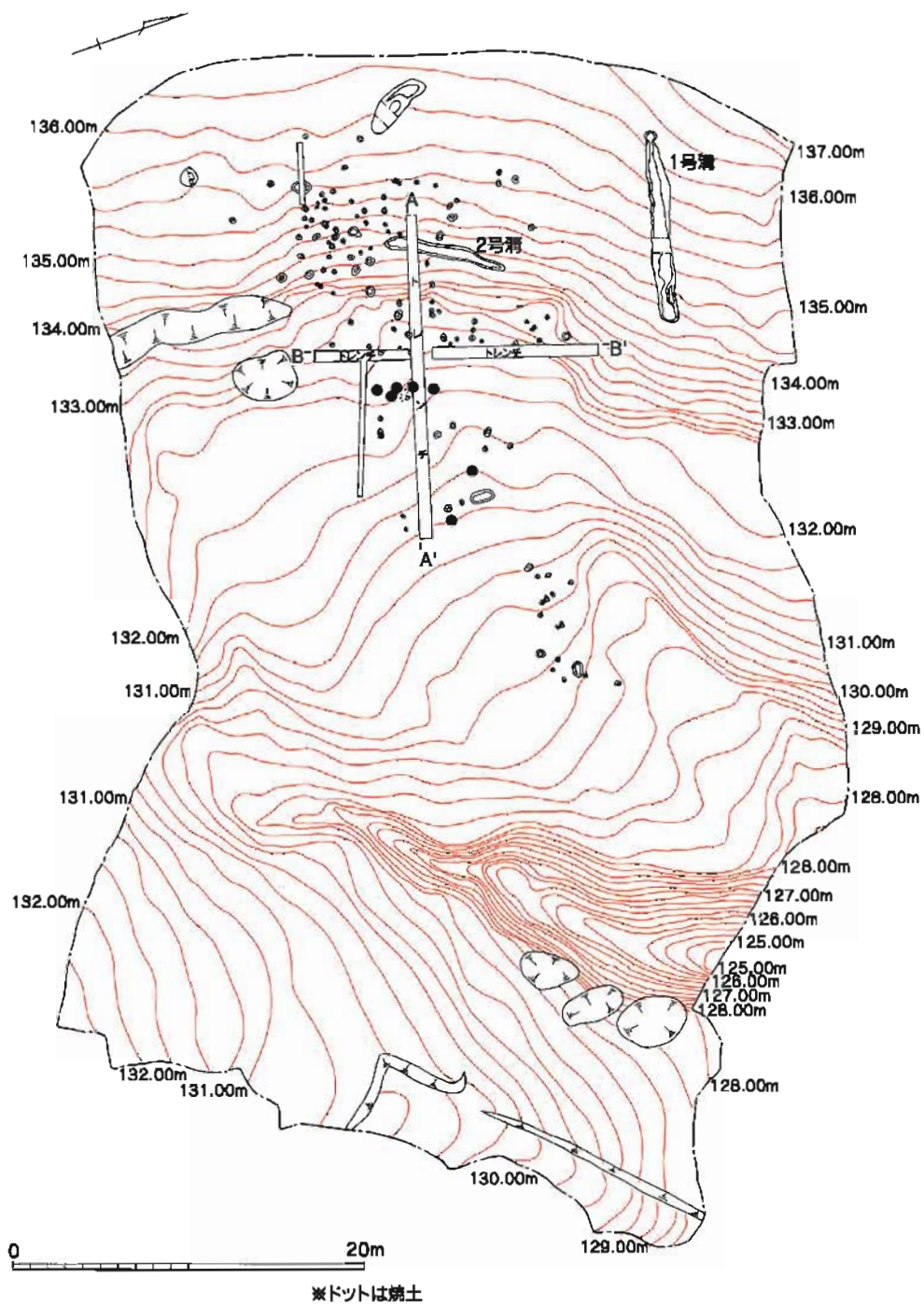
1) 溝

1号溝(第5図)

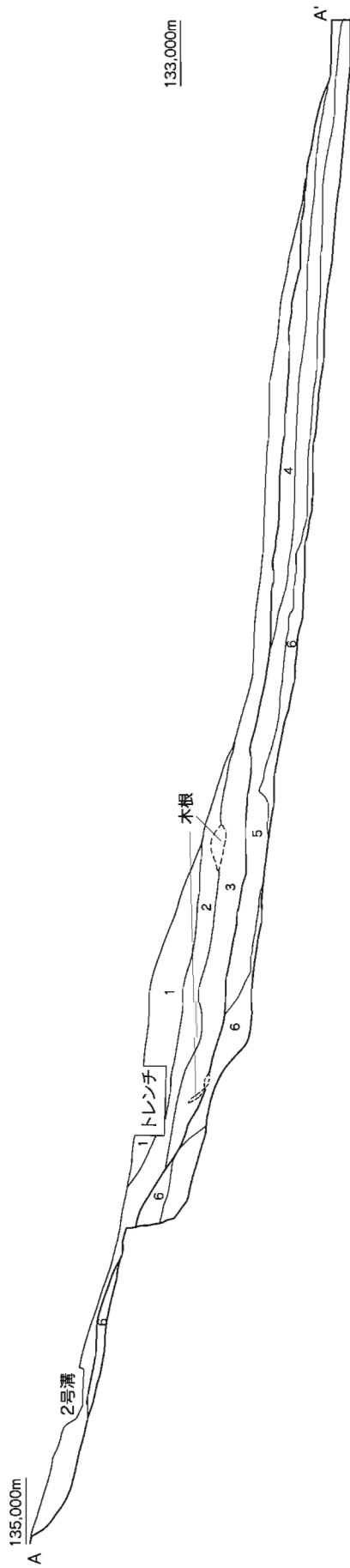
調査区北西端で検出された東西方向に直線的に長く延びる溝である。確認面での長さは約12.0m、最大幅約1.1m、最深部の深さ約30cmを測る。溝は凝灰岩の岩盤を掘り込んでつくられており、埋土は灰褐色土で凝灰岩の風化礫を多く含んだ軟質の土であった。この溝の中からは、白磁類を中心とした遺物が少量出土した。



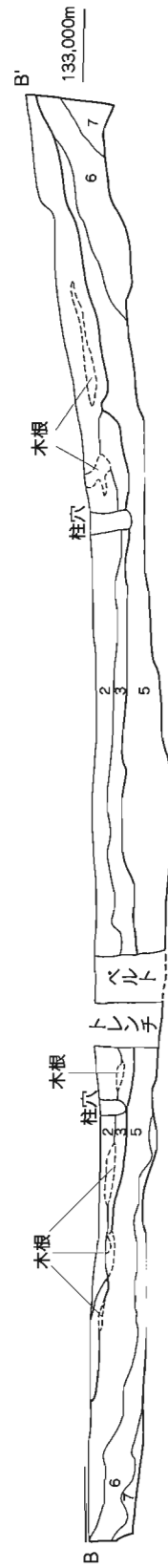
第4図 クビリ遺跡位置図(1/4,000)



第5図 クビリ遺跡遺構配置図(1/400)



- 1 暗茶褐色土。凝灰岩ブロックを多く含む。柱穴はこの上の層からの掘り込み。
 - 2 暗褐色土。凝灰岩ブロックを多く含む。
 - 3 黒褐色土。土器・礫土を多く含む。
 - 4 暗褐色粘質土。
 - 5 暗茶褐色粘質土。黄褐色粘質土や凝灰岩ブロックを多く含む。
 - 6 黄灰色土。凝灰岩岩壁風化土を多く含む。
 - 7 凝灰岩岩盤。
- ※4層以下は地山。

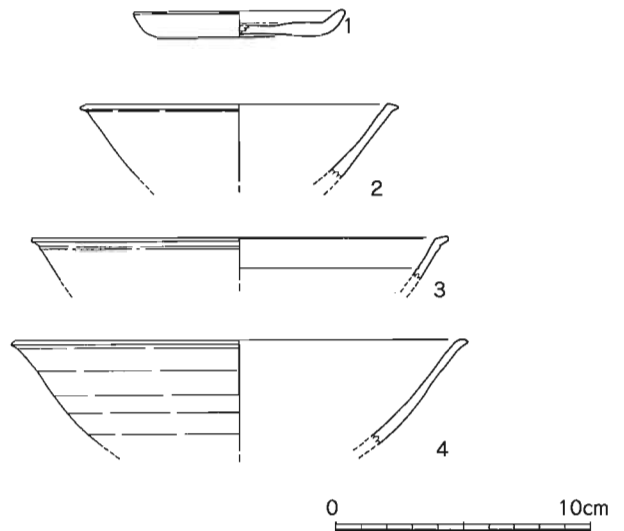


第6図 調査区土層図(1/80)

1号溝出土遺物(第7図)

1は土師器小皿である。底部は糸切りで底端部から口縁部にかけてやや斜め方向に立ち上がる。先端部は丸く収める。

2～4は白磁碗である。口縁端部はいずれも小さな平坦面を呈し、底部に向かって深く内湾する。



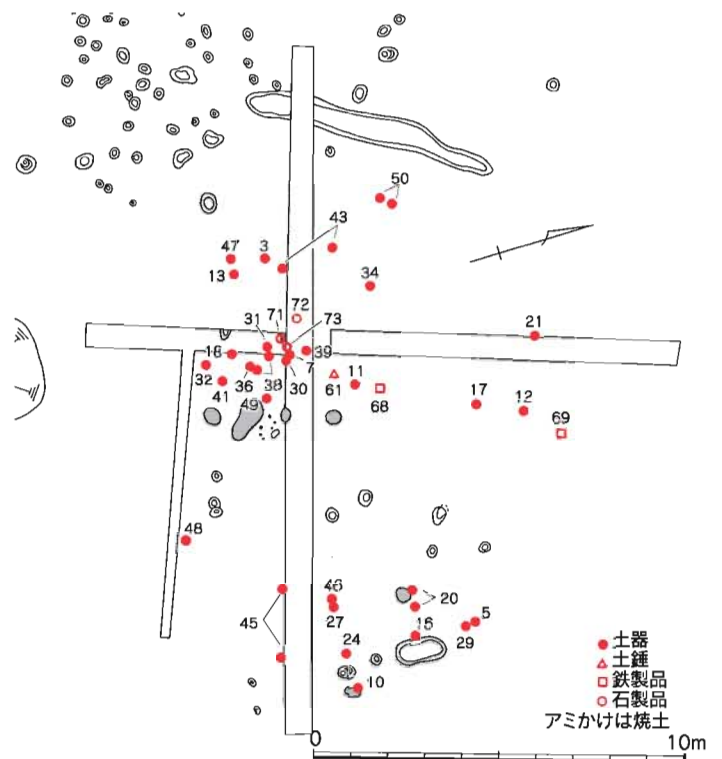
第7図 1号溝出土遺物実測図(1/3)

2)柱穴群(第5図)

調査区内では調査区西側に柱穴が多く検出された。これらの柱穴は掘り方もしっかりしており建物の存在は想定しえたがプランが明確なものは確認できなかった。また、これらの柱穴内からの出土遺物は少量で、図示可能な遺物も出土しなかった。

3)包含層(第8図)

調査の概要で触れたようにトレンチで確認できた遺物包含層は全部で3層である(第6図)。この土層図を見るとわかるように各層とも調査区西側から東側に向かって傾斜しながら堆積している。調査ではこれらの各層ごとに分けて掘り下げを行ったが、1層床面及び2層床面では遺物の出土は認められたものの遺構の存在は確認されなかった。したがって、1～2層は3層の上に自然堆積した層であることが確認された。また3層床面も土層を見る限り東側に向かって緩やかに傾斜していたが、4層との境では柱穴や2次的に熱を受けた焼成面が数カ所確認されるときも遺物もまとまって出土したことから、この層床面が遺構面であったことが明らかとなった。しかしながら人為的な整地が行われたかどうか、どのよ



※数字は第10～12図の遺物番号に対応する。

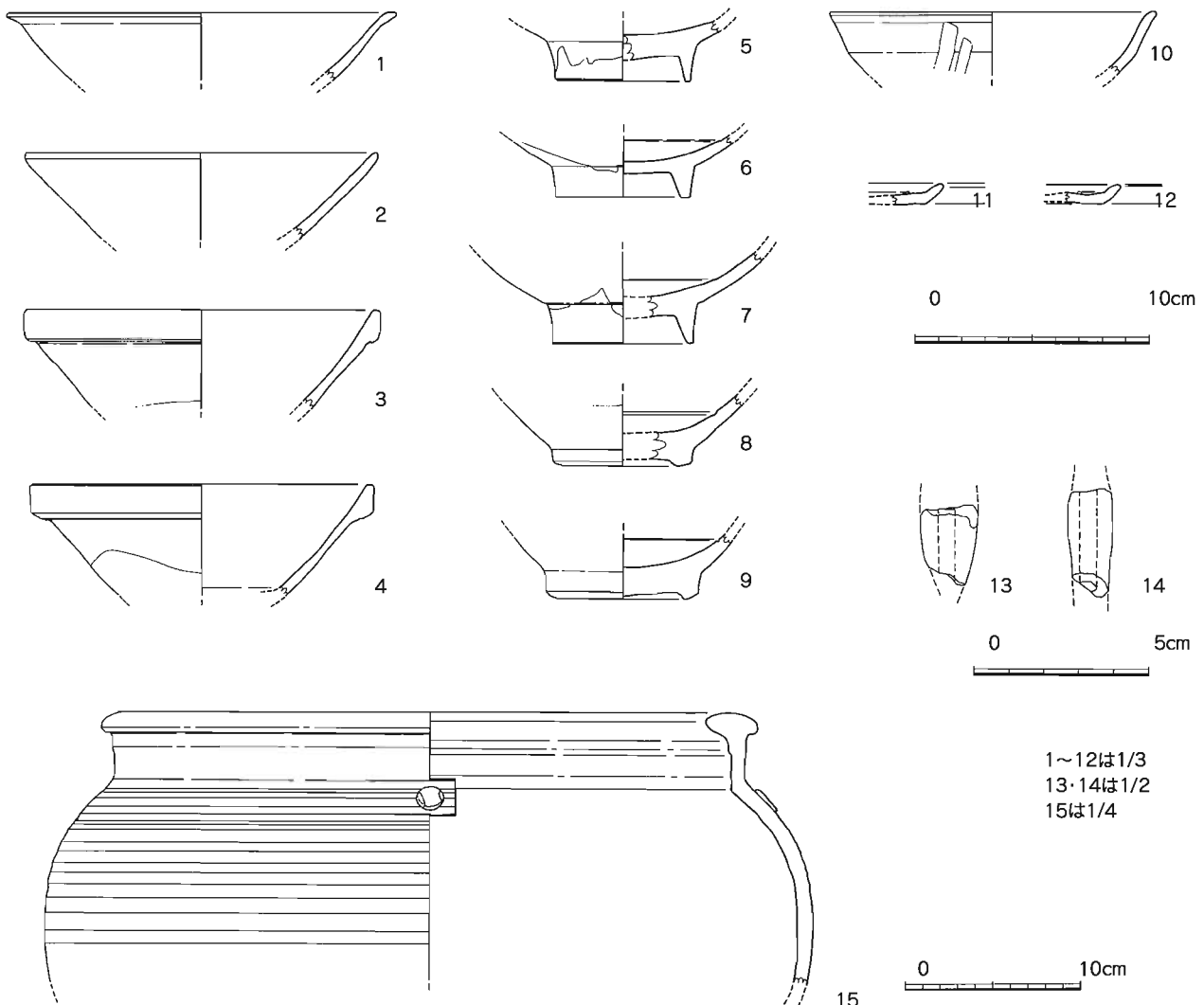
第8図 包含層3層床面遺構・遺物分布図(1/200)

うな遺構のプランであったかなどについては、柱穴の数も少なく確認するには至らなかった。

以下遺物の説明を加えるが、この調査の状況から包含層1～2層を包含層上層、3層を下層として分けて行うことにする。

包含層上層出土遺物(第9図)

1～9は白磁碗である。1～4は口縁部である。1はやや内湾気味に延びる胴部を呈し、口縁端部は平坦に仕上げる。2はほぼ直線的に延びる胴部を呈し、口縁端部はそのまま丸く収める。3～4はわずかに内湾気味に延びる胴部を呈し、口縁部は断面薄鋸状に肥厚させる。5～9は底部である。5～7は高い高台を呈し、6・7は内側に沈線が見られる。1のタイプの底部であろう。8・9は低い高台を呈している。内側には沈線が見られる。2～4のタイプの底部であろう。10は青磁碗である。胴部は内湾気味に延び、口縁端部でわずかに外反する。外面花文と見られる文様の一部が認められる。11・12は土師器小皿の小片である。底部は糸切りで、口縁部は底端部から短く立ち上がる。13・14は土錘片である。いずれも両端を欠損している。15は陶器である。口縁端部は断面楕円形に大きく肥厚させ、頸部は直口気味に口縁部へ続く。頸部～胴部にかけては大きく膨らみ、肩部には円形の浮文を貼付している。この遺物のみ時期が他の遺物と異なっ

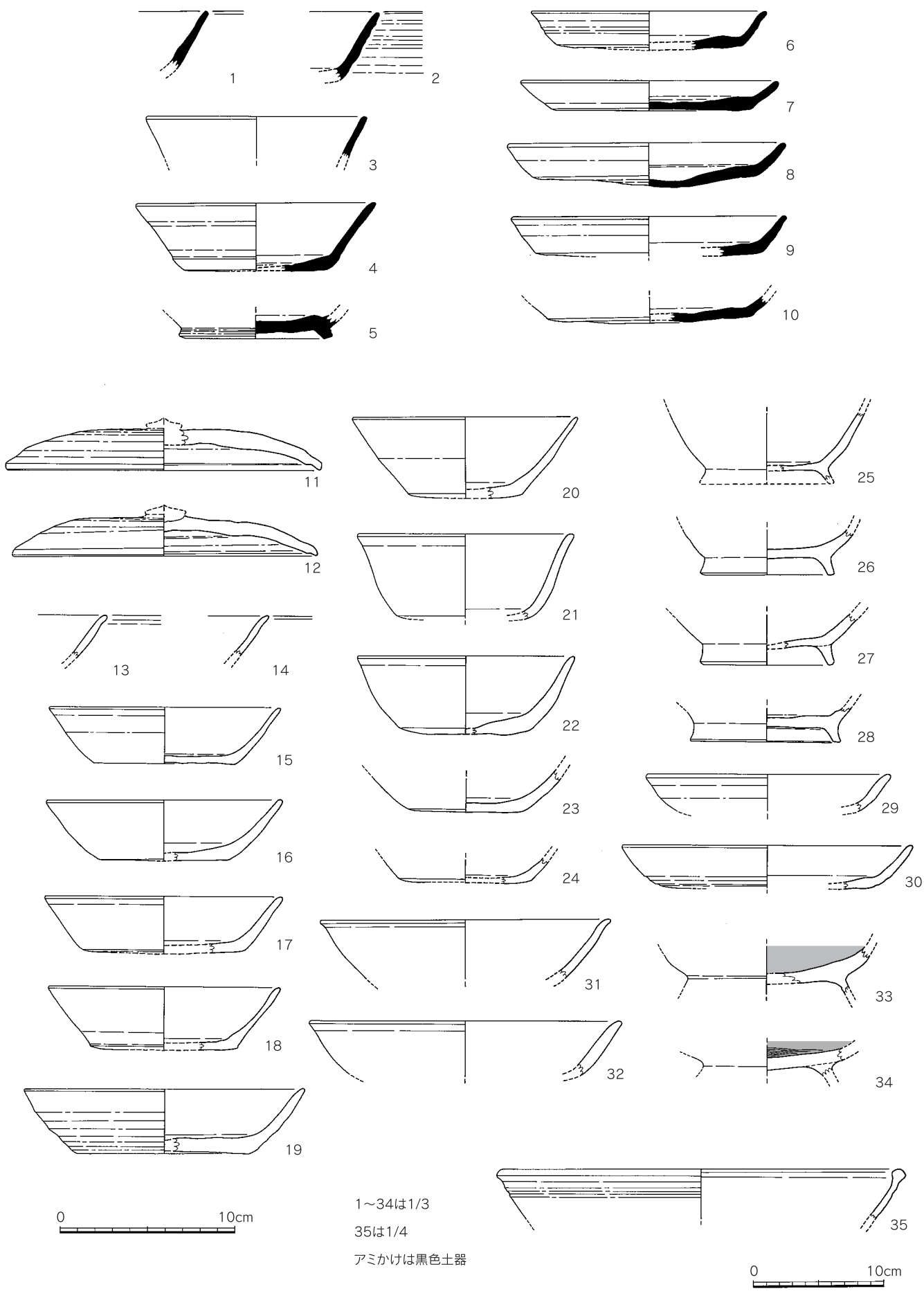


第9図 包含層上層出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)

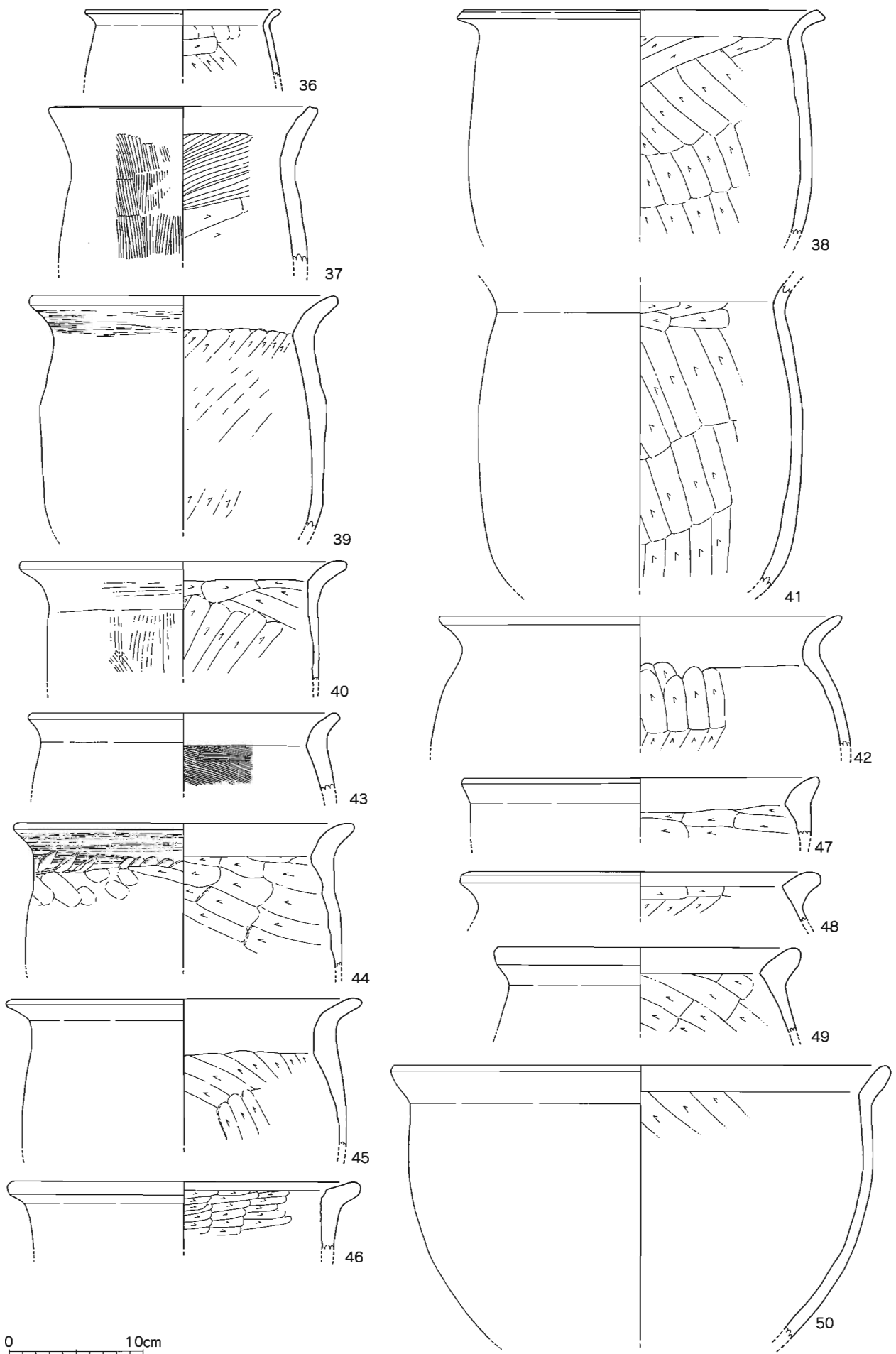
おり、木根等の攪乱によるものと推測される。

包含層下層出土遺物(第10～12図)

1～10は須恵器である。1～5は坏身である。1～3は口縁部片でいずれも口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がる。4はほぼ平坦な底部で底端部から口縁部にかけて1～3同様やや外反気味に立ち上がる。5は高台付坏身の底部片である。6～10は皿である。6は底部がレンズ状となり底端部から口縁部にかけては外反気味に立ち上がる。7は底部がやや上げ底状となり、底端部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め方向に立ち上がる。8は底部がレンズ状となり、底端部から口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。9も8と同様である。10も同様であるが口縁部を欠損する。11～34は土師器である。11・12は坏蓋である。ともにつまみ痕が見られるが、欠損している。どちらも器壁が厚く、口縁部に凹線がめぐり、端部は丸くおさめている。13～28は坏身である。13・14は口縁部片で胴部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外に向かって屈曲させている。15は底部を平坦に整え、底端部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がる。16も同様であるが底部はややレンズ状となっている。17も16と同様の底部であるが底端部から口縁部に向かってやや外反気味に立ち上がる。18はレンズ状の底部であるが、底端部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がる。19の底部は糸切りが施され、底端部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がる。20は深い体部にレンズ状の底部となる。底端部から口縁部にかけてはやや外反気味に立ち上がる。21は20同様深い体部を呈するが、20に比べ厚ぼったい。底端部から口縁部にかけてはやや内湾気味に延び端部付近で今度はわずかに外反する。22も21同様厚ぼったい器壁で、底部はレンズ状を呈し、底端部から口縁部にかけては内湾気味に延びる。23～24も同様の器形を呈するが、口縁部を欠損する。25～28は高台付坏身である。25は高台付け根付近からやや内湾気味に立ち上がる。口縁部を欠損。26～28も同様である。29・30は皿である。いずれも底部を欠損し、底端部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。31・32は埴である。31は内湾気味に立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。32も同様であるが、29に比べ器壁が厚い。33・34は黒色土器で、両者とも口縁部、底端部を欠損する。35は陶器である。口縁部は丸く収める。木根等による混入品と思われる。36～50は甕である。36は小型の甕で口縁部は「く」の字状に外反する。37は口縁部があまり開かないタイプで、内外面ともに荒い刷毛調整が施されている。38は36と類似した口縁部の形を呈している。39はやや荒いつくりで、口縁部は「く」の字に外反する。内面に粗いケズリ調整を施す。40も口縁部は「く」の字に外反し、胴部は直線的に延びている。41は口縁部を欠損するが、底部付近まで残存する。やや下膨れの形を呈する。42も口縁部は「く」の字に外反し、胴部はやや肩が張る。43は短く「く」の字に外反する口縁部を呈し、内面細かな刷毛調整が見られる。44も43と同様の器形を呈するが、つくりは荒い。45は分厚い頸部から短く外反する口縁部を持つ。46は逆「L」字状を呈する口縁部を呈する。内面は細く荒い削り調整が施される。47は短く外反する口縁部を持つ。48は内湾気味に立ち上がる胴部に分厚い口縁がついている。49も同様である。50は鉢状を呈する。口縁部はやや「く」の字に外反する。内面削り調整を施す。51～66は土錘である。51～55は小型のものでいずれも中央付近が算盤玉のように膨らみ、片側あるいは両端を欠損する。56～66は大型の土錘である。いずれも中央部分が膨らんでいるがつくりは小型のものに比べ粗雑である。いずれも片側ないしは両端を欠損している。67～69は鉄器である。67は刀子である。基部を欠損する。残存長12.2cmを測る。68も刀子である。基部と刃部の二つに分かれていたが同一個体と考えられる。69は手鎌あるいは

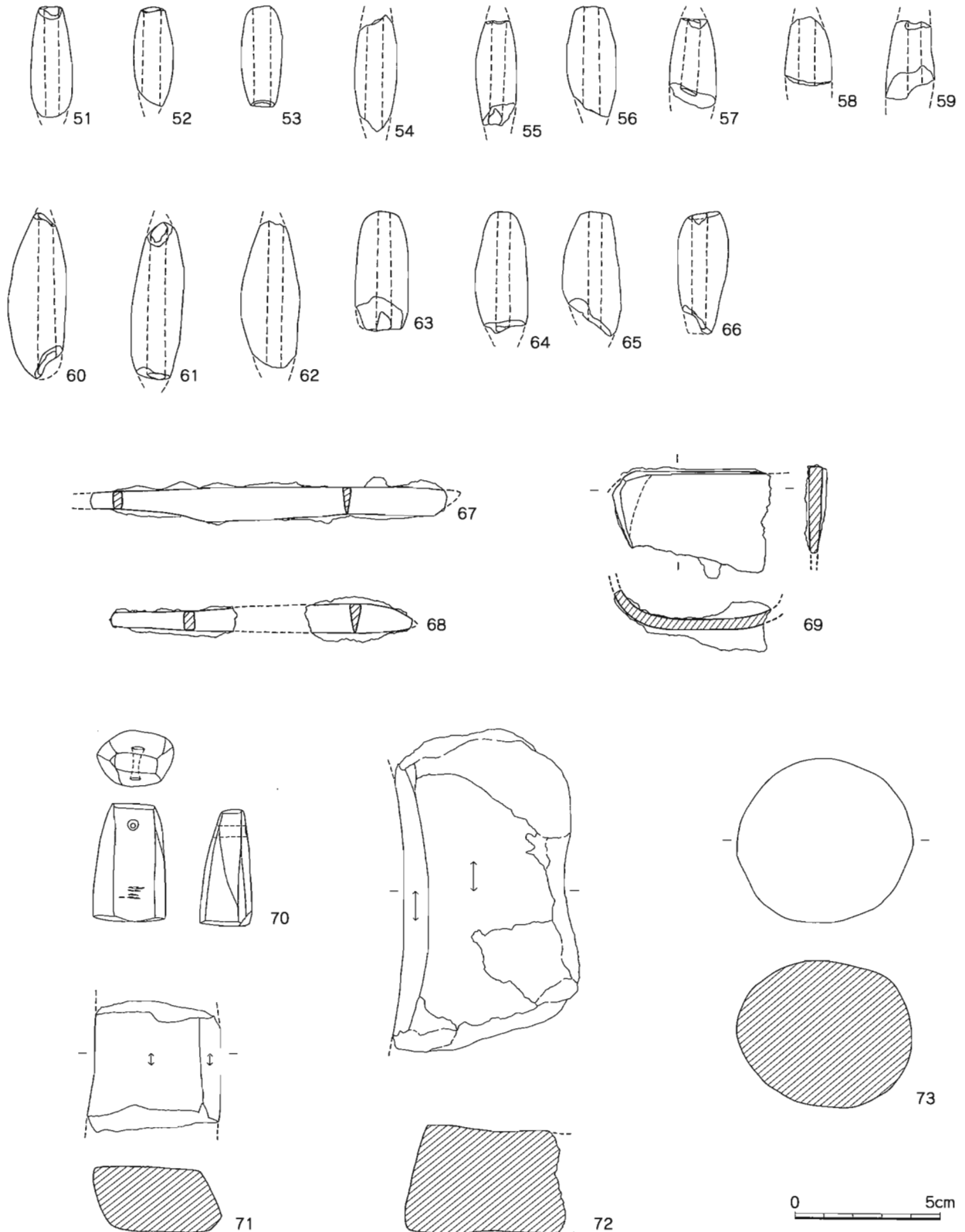


第10図 包含層下層出土遺物実測図①(1/3・1/4)



第11図 包含層下層出土遺物実測図②(1/4)

斧の破片である。70～72は砥石である。70は小型の仕上げ用砥石とみられ、天井部付近には吊り下げられるよう穴が穿たれている。底面は使用痕が見られる。全長4.0cm、重さ28.1gを測る。71・72は砂岩製の荒砥石である。いずれも使用痕が顕著。71は残存長4.5cm、重さ62.6g。72は残存長11.0cm、重さ429.9gを測る。73は不明石製品である。全体が2次焼成を受け、煤がこびりついている。重さ219.0gを測る。



第12図 包含層下層出土遺物実測図③(1/2)

第3節 調査のまとめ

1. 遺構等の時期について

クビリ遺跡では、調査の状況から包含層上に営まれた遺構群の時期(Ⅲ期)、包含層上層の時期(Ⅱ期)、包含層下層に遺構が営まれた時期(Ⅰ期)の大きく3つに分けることができる。

まず、Ⅰ期は、遺構からの遺物の出土がないもののその一帯より多くの遺物が出土した包含層下層出土の遺物をこの時期とする。この層からは須恵器と土師器が主として出土している。器種としては、須恵器は坏・皿、土師器は坏・皿・埴・黒色土器・甕で構成されていた。出土量を見ると須恵器は全体的に少なく、土師器の量が圧倒的に多い。器形的な特徴として第10図4の須恵器と15～18の土師器の坏を比較してみると器形や法量がほぼ類似している。また、高台付きの坏を見ても、第10図5の須恵器と25～28の土師器はいずれも底端部の位置に貼り付けている。こうした須恵器と土師器の器形的な類似点は、中島氏によると8世紀後半段階以降に顕著に見られるようになり、古代の小型器種の土器に特徴的であると指摘している^(註1)。これらの坏は、森田氏分類によるC期(9世紀前半)にあたる^(註2)。また土師器坏や埴を見るとタイプの的には中島氏分類による土師器碗Ⅰ-3～6類までを含んでいると考えられる^(註3)。また坏と同様に黒色土器埴も出土しているが、これらは脚が長いタイプで中島氏分類の黒色土器碗Ⅱ類に相当すると思われる。このⅡ類は中島氏によって土師器碗Ⅰ-5類の時期と並行して位置づけられている。中島氏によれば9世紀前半には甕などを除く須恵器の小型品が姿を消すことが指摘され、また、中島氏分類のⅠ-6類は10世紀前半に位置づけられており、このことからⅠ期は9世紀初頭から10世紀前半の時期までの遺物を含むものとした。なお、第10図19、31の土師器、35の陶器は明らかにこの時期には見られない遺物であり、包含層上層(Ⅱ期)からの混入品と考えられる。

次にⅡ期の遺物を見ると、白磁碗が圧倒的に多く、他に青磁碗や陶器、土師器小皿などが出土し、これらはいずれもⅠ期で見られなかった遺物である。白磁碗は特徴から山本氏分類の碗Ⅳ1a、Ⅶ1、Ⅶ2にあたり、XⅣ期からXⅤ期の時期として捉えられている^(註4)。青磁碗は、1点のみ本遺跡からは出土しているが、外面に削りのような文様が施される同安窯系青磁碗の特徴を持っており、白磁碗の時期とほぼ同時期とみなされる。土師器小皿は破片のみが出土したが、口縁部への立ち上がりが高く、これらの陶磁器類と同時期のセットとして考えてよいと思われる。白磁碗の割合が高く、また龍泉窯系青磁碗が流入しておらず、したがってⅡ期は山本氏のC期(11世紀後半～12世紀前半)を主体にD期(12世紀中頃～後半)に一部入るものと推測される。

なお、1号溝出土遺物も包含層上層より出土した白磁碗や土師器小皿とほぼ同様のものであり、同時期の可能性がある。

最後にⅢ期に伴う遺物であるが、遺構からは出土遺物がないため不明である。ここでは少なくともⅡ期以降であり、柱穴埋土の状況からさほど新しくないと判断されるため、遅くとも中世の遺構としてとらえておきたい。

2. 遺跡の性格について

クビリ遺跡は石ヶ迫遺跡の所在する谷からさらに中に入りこんだ狭い谷の中で営まれていた。このことについて、本遺跡の包含層下層から出土した遺物は、若干の時期差はあるものの石ヶ迫遺跡で確認された各遺構の時期とほぼ重複するものであった。したがって、ある一時期においては両者は同時に存在していたはずであり、何らかの意図があつてこのような立地の場所に離れて生活を行っていたようである。このことについて、注目すべき遺物が本遺跡から出土した鉄滓(碗

型鍛冶滓)である。遺跡から出土した鉄滓はわずか1点にすぎなかったが、砥石や鉄器なども出土しているほか、本遺跡を下った場所にある石ヶ迫遺跡A地区の溝からは鞆羽口も出土している^(註5)。鞆や鉄滓は鍛冶関連の遺構に伴う特有の遺物であり、そのものがある程度の遺跡の性格を物語るものである。石ヶ迫遺跡B地区では鍛冶遺構や鍛冶関連遺構や遺物は確認されなかったが、このことはA地区で発見された鞆羽口がB地区ではなく別の場所で使用されていたことを示すものである。それが本遺跡かどうかは不明であるが、鍛冶遺構が集落から離れて見つかることは、古墳時代中期の鍛冶工房跡が発見された荻鶴遺跡^(註6)でも明らかで、民俗事例を見ても火を使う鍛冶作業が火災の危険性を伴うことから集落と離れて営まれていたことは確かである。こう考えるとクビリ遺跡の包含層下層床面より検出された数ヶ所の焼土面は鍛冶炉跡であった可能性が高く、わざわざ切り立った日当たりも悪い狭い谷の中に遺構が営まれたことも理解できる。このことから本遺跡の性格は、中心集落である石ヶ迫遺跡B地区で確認された集落の鍛冶作業場として営まれていた可能性が高いと推測される。

註)

- 1) 中島恒次郎「12 九州北部」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995
- 2) 森田勉「大宰府の出土品」『大宰府陶磁器研究』-森田勉氏遺稿集-森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995
- 3) 中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会 1992
- 4) 山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年-大宰府出土例を中心として-」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究 1988
- 5) 行時桂子編『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 2004
- 6) 行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 1995

第2表 クビリ遺跡出土土器観察表①

挿入番号	種別	器種	遺構名	法 量				調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考
				口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面	
第7図-1	土師器	小皿	1 溝	(8.3)	-	(6.2)	(1.0)	黒コナデ	黒コナデ	ABCD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	
第7図-2	白磁	皿	1 溝	(12.4)	-	-	(2.9)	白釉	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第7図-3	白磁	碗	1 溝	(16.2)	-	-	(1.7)	白釉	白釉	-	良好	黄灰褐色	黄灰褐色	黒化のため黄色味をおびる。
第7図-4	白磁	碗	1 溝	(17.8)	-	-	(4.1)	白釉	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第9図-1	白磁	碗	包含層	(16.6)	-	-	(2.9)	白釉	白釉	-	良好	黄灰白色	黄灰褐色	
第9図-2	白磁	碗	I~II層	(15.0)	-	-	(3.7)	白釉	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第9図-3	白磁	碗	I~II層	(15.2)	-	-	(4.3)	白釉	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第9図-4	白磁	碗	I~II層	(14.6)	-	-	(4.8)	白釉	白釉	-	良好	黄灰白色	黄灰白色	
第9図-5	白磁	碗	II層	-	-	(5.8)	(2.6)	白釉	白釉	-	良好	黄灰褐色	黄灰褐色	
第9図-6	白磁	碗	包含層	-	-	(5.8)	(2.4)	白釉	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第9図-7	白磁	碗	包含層	-	-	(6.0)	(3.9)	白釉	白釉	-	良好	黄灰白色	黄灰褐色	
第9図-8	陶器	碗	I層	-	-	6.5	(2.8)	白釉ヘラケズリ	白釉	B	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	内面反らぬ。黄色味をおびる。
第9図-9	白磁	碗	包含層	-	-	(5.9)	(3.1)	露胎	白釉	-	良好	灰白色	灰白色	
第9図-10	青磁	碗	包含層・I層	(13.8)	-	-	(2.7)	淡緑灰釉	淡緑灰釉	-	良好	淡緑灰色	淡緑灰色	外周一部文様あり。
第9図-11	土師器	小皿	II~III層	-	-	-	(1.85)	黒コナデ	黒コナデ	B	良好	淡褐色	淡褐色	底面未切り。
第9図-12	土師器	小皿	I~II層	-	-	-	(1.8)	黒コナデ	黒コナデ	BD	良好	淡茶色	淡茶色	
第9図-15	陶器	甕	I~II層	(37.2)	43.6	-	(15.4)	ヘラ状工具による調整	ナデ	B	良好	暗褐色	暗褐色	口縁下に内形文あり
第10図-1	須恵器	坏	III層	-	-	-	(3.2)	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	暗青灰色	暗青灰色	
第10図-2	須恵器	坏	III層	-	-	-	(3.9)	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	淡灰白色	淡灰白色	
第10図-3	須恵器	坏	No.72	(12.6)	-	-	(2.35)	ヨコナデ	ヨコナデ	BE	良好	暗灰色	暗灰色	
第10図-4	須恵器	坏	III層	(13.7)	-	(8.1)	3.8	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	暗灰色	暗褐色	底面ヘラ切り未調整
第10図-5	須恵器	坏	No.28	-	-	8.9	(1.3)	ヨコナデ	ナデ	BE	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-6	須恵器	皿	III層	(13.4)	-	(10.6)	(2.3)	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-7	須恵器	皿	No.92	14.8	-	11.5	1.7	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	底面ヘラ切り未調整
第10図-8	須恵器	皿	III層	15.9	-	12.9	2.5	黒コナデ	黒コナデ	BEH	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	底面ヘラ切り未調整
第10図-9	須恵器	皿	III層	(15.6)	-	(13.0)	(2.3)	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-10	須恵器	皿	No.7	-	-	(11.8)	(1.4)	ナデ	ナデ	B	良好	淡灰白色	淡灰白色	底面ヘラケズリ。
第10図-11	土師器	坏蓋	No.38	(16.0)	-	-	(2.5)	黒コナデ	黒コナデ	ABCD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	ツマミ痕あり
第10図-12	土師器	坏蓋	III層・No.42	17.5	-	-	(2.3)	黒コナデ	黒コナデ	BCD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	ツマミ痕あり
第10図-13	土師器	坏	No.67	-	-	-	(2.3)	黒コナデ	黒コナデ	ABC	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第10図-14	土師器	坏	III層	-	-	-	(2.2)	ナデ	ナデ	ABG	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	内形どとも片割り?
第10図-15	土師器	坏	III層	13.2	-	8.1	3.2	黒コナデ	黒コナデ	BDG	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-16	土師器	坏	No.3	(13.4)	-	(7.6)	3.4	黒コナデ	黒コナデ	BEG	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-17	土師器	坏	No.41	(13.6)	-	(9.4)	3.2	黒コナデ	黒コナデ	BDG	良好	橙褐色	橙褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-18	土師器	坏	No.80	(13.2)	-	(8.4)	3.6	黒コナデ	黒コナデ	ABDG	良好	淡褐色	淡褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-19	土師器	坏	III層	(16.0)	-	(9.8)	3.6	黒コナデ	黒コナデ	ABCD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	底面未切り
第10図-20	土師器	坏	No.18・20	(12.8)	-	(6.5)	4.6	黒コナデ	黒コナデ	ABCD	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-21	土師器	坏	No.50	(12.4)	-	-	(4.8)	ナデ	ナデ	AC	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	
第10図-22	土師器	碗	III層	(12.4)	-	(7.6)	(4.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	ABC	良好	淡灰色	淡灰色	
第10図-23	土師器	坏	III層	-	-	(6.6)	(2.5)	黒コナデ	黒コナデ	ABD	良好	橙褐色	橙褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-24	土師器	坏	No.8	-	-	(7.6)	(1.9)	黒コナデ	黒コナデ	ABC	良好	橙褐色	橙褐色	底面ヘラケズリ。
第10図-25	土師器	高台付坏	III層	-	-	(7.6)	(4.0)	黒コナデ	ヨコナデ	ABC	良好	淡褐色	淡褐色	
第10図-26	土師器	高台付坏	III層	-	-	7.6	(3.6)	ナデ	ナデ	BDG	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	
第10図-27	土師器	高台付碗	No.9	-	-	(7.6)	(2.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	BDG	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第10図-28	土師器	高台付碗	No.120	-	-	8.5	(2.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	ABC	良好	淡灰色	淡灰色	
第10図-29	土師器	坏	No.29	(14.0)	-	-	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	ABD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	精製土器。
第10図-30	土師器	皿	No.93	(16.6)	-	-	(2.4)	黒コナデ	黒コナデ	BDG	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	精製土器。底面ヘラケズリ。
第10図-31	土師器	脚付碗	No.118	(16.6)	-	-	(3.35)	黒コナデ	黒コナデ	ABD	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	精製土器。
第10図-32	土師器	碗	No.79	(17.8)	-	-	(3.1)	黒コナデ	黒コナデ	BCDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第10図-33	黒色土器	碗	III層	-	-	-	(2.8)	ナデ	ナデ	ABCD	良好	淡黄褐色	黒色	高台付碗ヘラケズリ。
第10図-34	黒色土器	碗	No.55	-	-	-	(1.7)	ナデ	ヘラミガキ	ABCD	良好	茶白色	黒色	高台内ヘラケズリ。
第10図-35	陶器	甕	III層	(31.2)	-	-	(3.8)	黒コナデ	黒コナデ	BE	良好	暗褐色	暗褐色	自然釉。

※単位はcm。()は現存長。

胎土…A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:雲母 H:砂粒

第3表 クビリ遺跡出土土器観察表②

挿図番号	種別	器種	遺構名	法 量				調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考
				口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面	
第11図-36	土師器	甕	No.97	(14.6)	-	-	(4.95)	ナ デ	ハラケズリ	ABCD	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第11図-37	土師器	甕	Ⅲ層	(20.1)	-	-	(11.5)	ハ ケ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗褐色	暗褐色	
第11図-38	土師器	甕	Ⅲ層・No.96	(27.4)	(25.6)	-	(16.6)	ナ デ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第11図-39	土師器	甕	Ⅲ層・No.105	(23.0)	(21.2)	-	(17.3)	ナ デ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗褐色	暗褐色	
第11図-40	土師器	甕	Ⅲ層	(24.4)	-	-	(8.3)	ナ デ	ハラケズリ	BCGH	良 好	淡褐色	淡褐色	外側にハケメ施す
第11図-41	土師器	甕	No.81	-	(24.2)	-	(22.7)	ヨコナデ	ケズリ	ABC	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	内面に黒いこげつきあり。
第11図-42	土師器	甕	Ⅲ層	(30.0)	-	-	(9.7)	ヨコナデ	ケズリ	ABC	良 好	淡褐色	淡褐色	
第11図-43	土師器	甕	No.60・71	(23.2)	-	-	(5.9)	ヨコナデ	ハ ケ	ABC	良 好	淡茶褐色	淡茶褐色	
第11図-44	土師器	甕	Ⅲ層	(25.4)	-	-	(10.7)	ナ デ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	胎土に赤い点を含む
第11図-45	土師器	甕	Ⅲ層・No.115	(26.6)	-	-	(10.8)	ナ デ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	胎土に黒い点を含む
第11図-46	土師器	甕	No.10	(26.2)	-	-	(5.0)	ヨコナデ		ABC	良 好	暗褐色	暗褐色	
第11図-47	土師器	甕	Ⅲ層・No.66	(26.6)	-	-	(4.4)	ナ デ	ハラケズリ	ABC	良 好	暗褐色	暗褐色	胎土に黒い点を含む
第11図-48	土師器	甕	No.109	(27.0)	-	-	(3.3)	ヨコナデ	ハラケズリ	ABCD	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第11図-49	土師器	甕	No.90	(23.8)	-	-	(6.2)	ナ デ	ハラケズリ	ABCD	良 好	暗褐色	暗褐色	
第11図-50	土師器	甕	No.61・63	(37.3)	(34.8)	-	(20.4)	ナ デ	ケリ残付	ABC	良 好	暗褐色	暗褐色	

※単位はcm。()は現存長。

胎土…A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:雲母 H:砂粒

第4表 クビリ遺跡出土土製品観察表

挿図番号	器種	遺構名	法 量				胎 土	色 調	備 考
			長さ	最大幅	孔径	重さ(g)			
第9図-13	土 錘	I層	(3.1)	1.3	0.5	(3.5)	ABD	淡茶灰色	
第9図-14	土 錘	一括	(2.3)	1.6	0.5	(4.2)	ABC	淡茶灰色	
第12図-51	土 錘	Ⅲ層	(3.8)	1.5	0.5	(5.6)	ABC	淡灰白色	胎土緻密
第12図-52	土 錘	Ⅲ層	(3.4)	1.4	0.6	(3.8)	ABD	淡灰白色	精製
第12図-53	土 錘	Ⅲ層	3.5	1.4	0.6	5.5	AB	淡茶白色	光形。精製
第12図-54	土 錘	Ⅲ層	(4.0)	1.4	0.6	(6.3)	ABD	淡茶褐色	精製
第12図-55	土 錘	Ⅲ層	(3.5)	1.5	0.5	(5.4)	ABD	淡茶灰色	胎土緻密。精製
第12図-56	土 錘	Ⅲ層	(3.8)	1.7	0.6	(7.8)	ABCD	淡茶灰色	
第12図-57	土 錘	Ⅲ層	(3.1)	1.6	0.5	(7.9)	ABCD	淡茶灰色	
第12図-58	土 錘	Ⅲ層	(2.3)	1.6	0.5	(3.9)	ABC	淡灰白色	胎土緻密
第12図-59	土 錘	Ⅲ層	(2.7)	1.6	0.5	(3.2)	ABC	淡茶灰色	
第12図-60	土 錘	Ⅲ層	(5.6)	2.0	0.6	(15.0)	ABC	淡茶灰色	
第12図-61	土 錘	No.39	(5.3)	1.8	0.6	(13.3)	ABC	淡茶灰色	
第12図-62	土 錘	Ⅲ層	(5.0)	2.0	0.5	(15.4)	ABC	淡茶灰色	
第12図-63	土 錘	Ⅲ層	4.1	1.8	0.5	13.0	ABCH	淡茶灰色	ほぼ光形。砂粒多い
第12図-64	土 錘	Ⅲ層	(4.2)	1.8	0.5	(10.5)	ABCD	淡茶灰色	
第12図-65	土 錘	Ⅲ層	(4.3)	2.0	0.4	(12.0)	ABC	淡茶灰色	
第12図-66	土 錘	Ⅲ層	4.2	1.8	0.5	10.0	ABC	淡茶褐色	ほぼ光形。

※単位はcm。()は現存長・重。

胎土…A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:雲母 H:砂粒

第5表 クビリ遺跡出土鉄製品観察表

挿図番号	器種	遺構名	法 量				備 考
			長さ	刃部最大幅	厚さ	重さ(g)	
第12図-67	刀 子	一括	(12.2)	1.2	0.3	(21.0)	
第12図-68	刀 子	No.35	(8.0)	(1.0)	0.35	(12.2)	
第12図-69	鎌または鍬	No.44	(3.5)	(5.3)	0.4	(31.2)	

※単位はcm。()は現存長・重。

第6表 クビリ遺跡出土石製品観察表

挿図番号	器種	遺構名	法 量				石 材	備 考
			長さ	最大幅	厚さ	重さ(g)		
第12図-70	砥石	Ⅲ層	4.0	2.5	1.9	28.1	-	光形
第12図-71	砥石	No.34	(4.5)	(4.5)	2.2	(62.6)	砂岩	4面使用
第12図-72	砥石	No.37	(11.0)	(6.4)	3.7	(429.9)	砂岩	3面使用
第12図-73	用途不明石製品	No.32	5.6	6.0	5.0	219.0	-	光形

※単位はcm。()は現存長・重。



クビリ遺跡全景



クビリ遺跡全景

写真図版2



1号溝完掘状況



掘下げ状況



A-A' 土層



焼土検出状況



遺物出土状況①



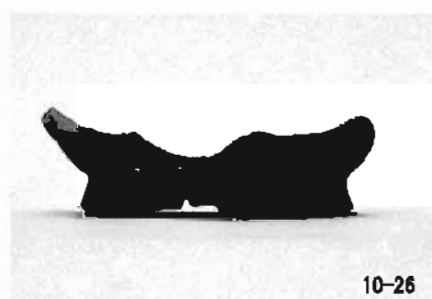
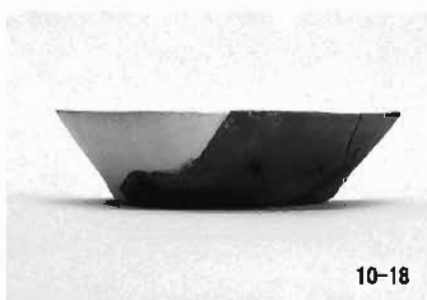
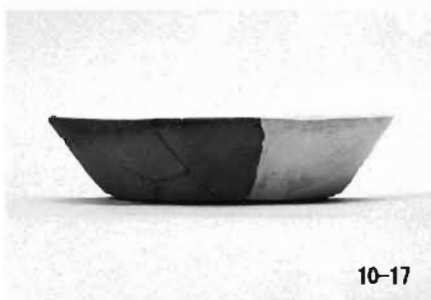
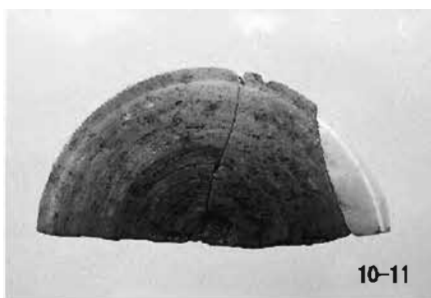
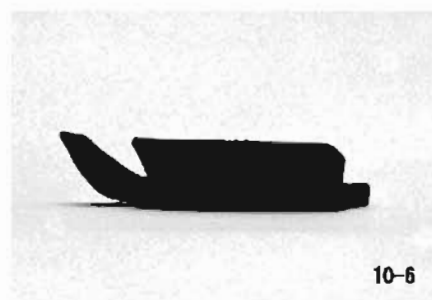
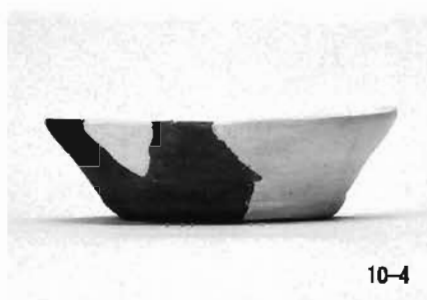
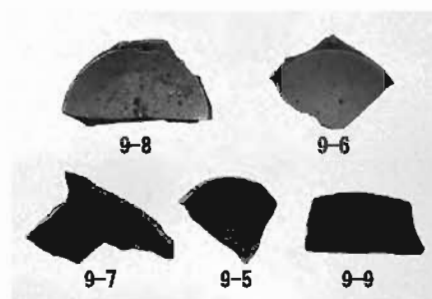
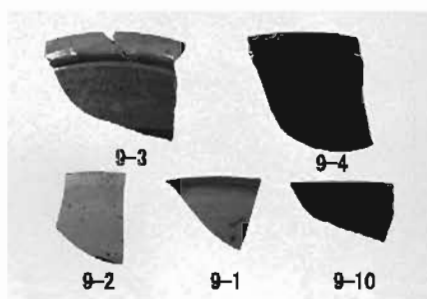
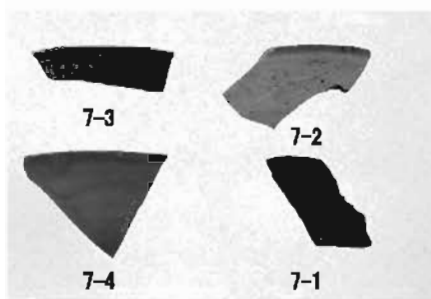
遺物出土状況②



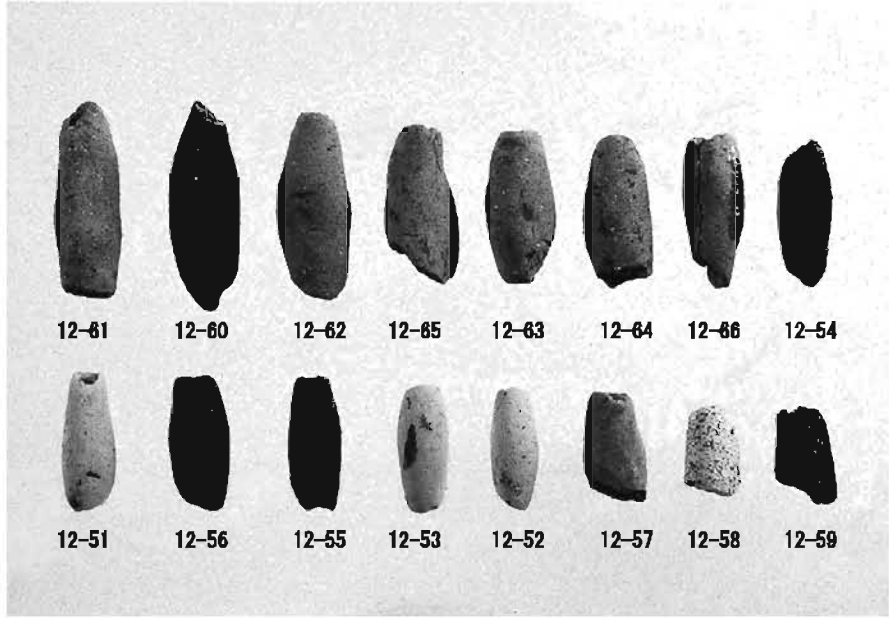
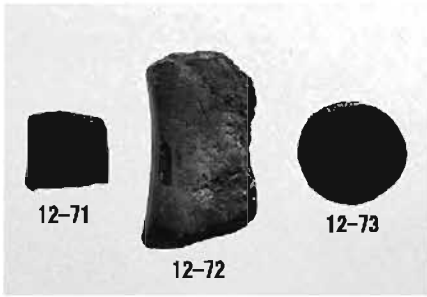
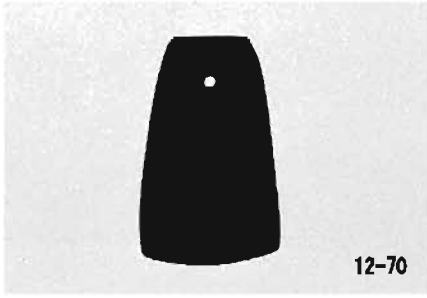
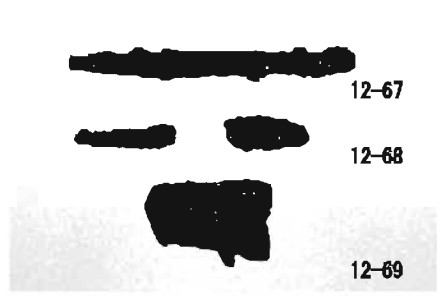
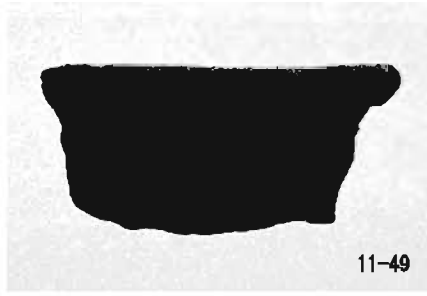
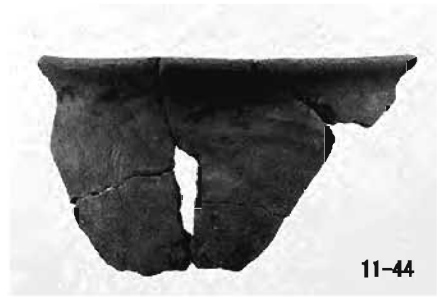
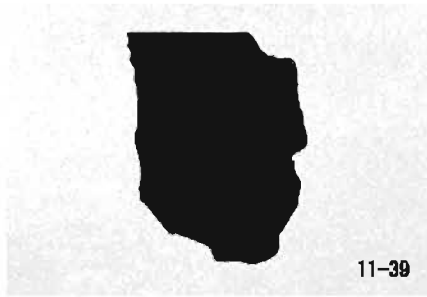
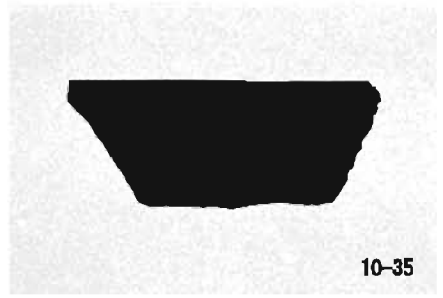
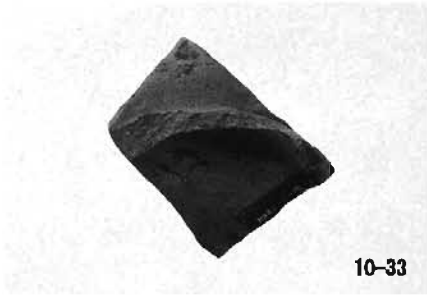
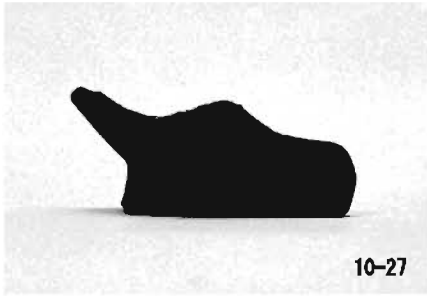
遺物出土状況③



遺物出土状況④



写真图版4



第3章 有田塚ヶ原遺跡



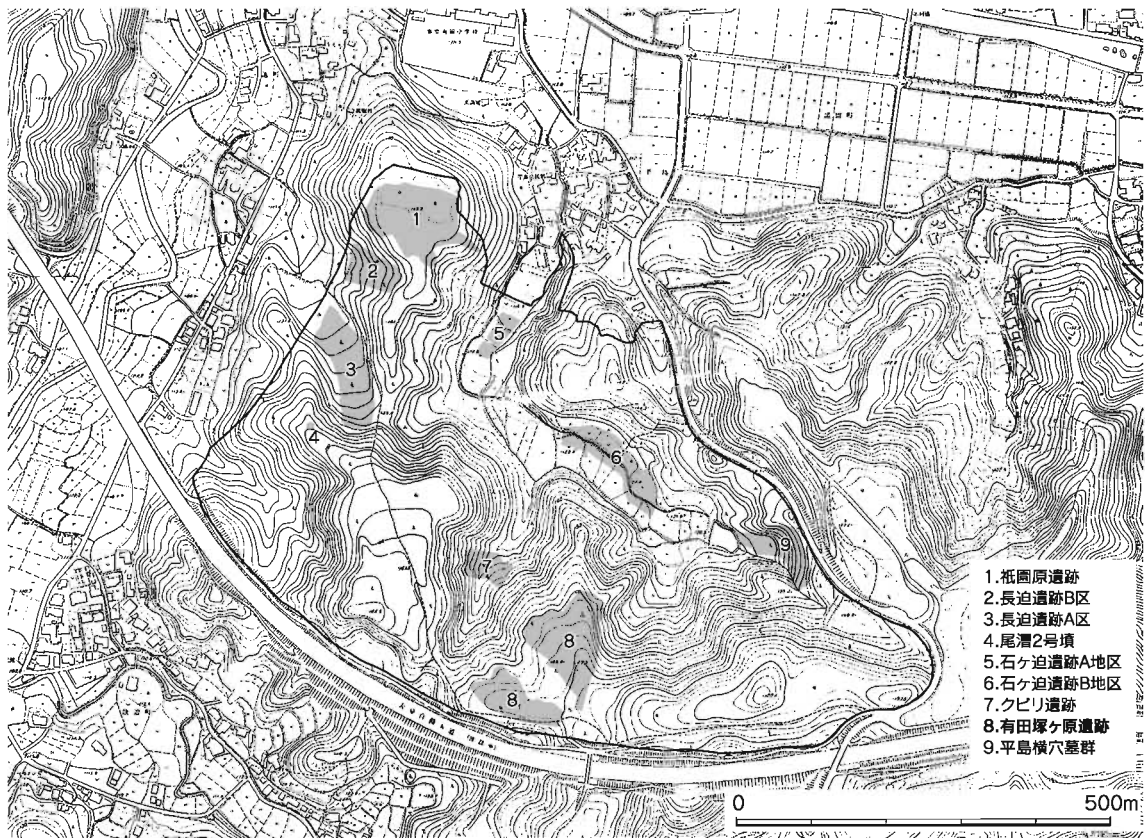
写真6 有田塚ヶ原遺跡全景（西から）

第1節 調査の経過

有田塚ヶ原遺跡は、広く展開する丘陵上に立地する。この丘陵の南側は池辺地区の深い谷が広がり、また北側は石ヶ迫遺跡の谷を望む。西側は尾根づたいに通称「小原」と呼ばれる丘陵に続き、その間の侵食谷にクビリ遺跡が存在する。東側は、平島横穴墓群などのある谷を望みながらかえでの葉状に尾根筋が延び、弥生時代の遺跡の存在が確認されている片山原遺跡のある丘陵へ続いている。この丘陵南側の平坦部には大分自動車道建設に伴って発掘調査が行われた古墳時代の横穴式石室を持つ有田塚ヶ原古墳群が立地していた。この丘陵は大半が掘削の対象となったが、このように丘陵周辺には多くの遺跡が点在し、また試掘調査でも柱穴や土坑などの遺構が確認されていたものの範囲が広いと、まずトレンチ調査により遺構の広がりを確認した後に調査区域を定めて発掘調査を行うことにした。その結果、二又に分かれる丘陵南側からは柱穴群が確認され、北側では土坑が点在していることが確認された。そこで、調査区を南側と北側に分け、トレンチで確認された遺構の広がりに合わせて調査区を設定し、表土除去・遺構検出作業を行ったところ、調査区南側で5棟の掘立柱建物群、北側で多数の土坑群が検出されるに至った。

本遺跡の調査対象面積は約13,000㎡で、調査期間は平成8年2月15日から3月28日までである。調査の経過等の概要については、以下のとおりである。

- 平成8年2月15日 表土除去を始める（～3月2日）
- 2月26日 遺構検出を始める。
- 3月5日 遺構実測を始める。
- 3月22日 空中写真撮影を行う。
- 3月28日 調査作業を完了する。



第13図 有田塚ヶ原遺跡群調査遺跡位置図(1/10,000)

第2節 調査の内容

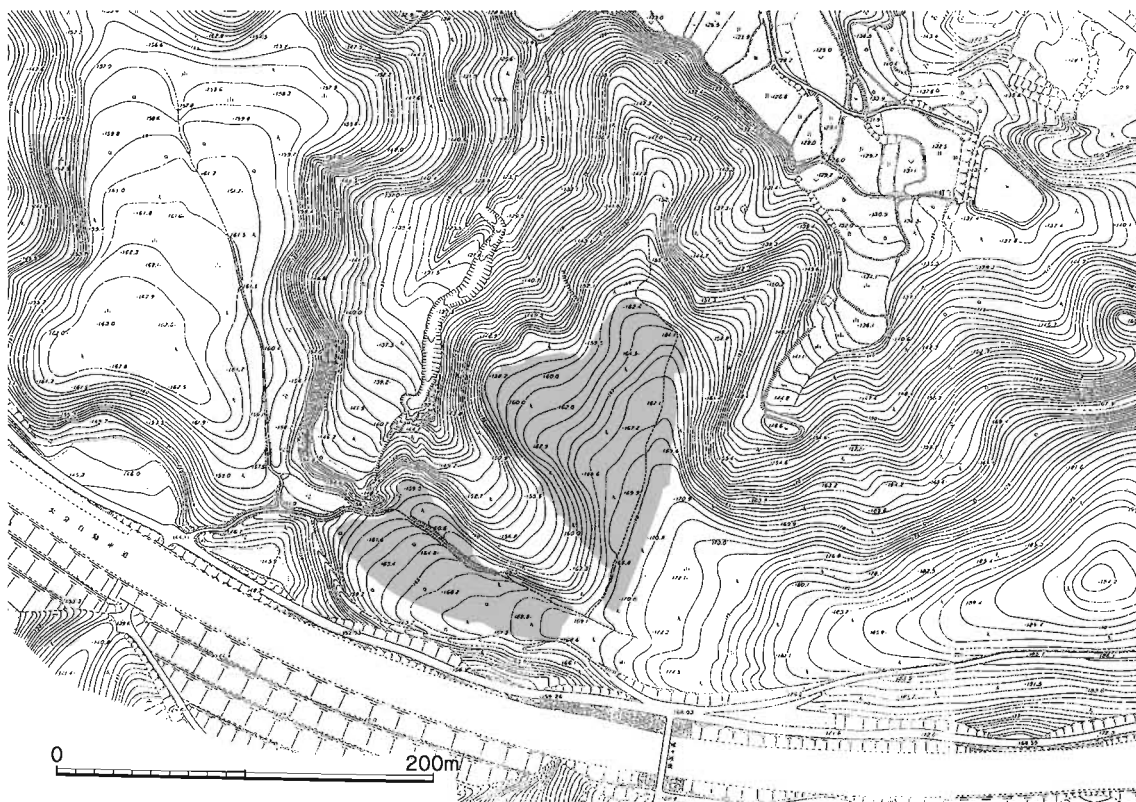
1. 調査の概要

この丘陵の大部分は杉林で覆われていたため、これらの伐採が終了した後にトレンチ調査を行い、遺跡の範囲を確定させた後、発掘調査に移っていった。遺構の確認された範囲で調査区を南側と北側に分け、まず南側から開始した。南側の表土は浅くわずか20cm程度取り除くと黄褐色の地山面が検出され、広げていくうちに数は少ないものの柱穴が点々と検出された。表土除去作業はこれらの柱穴群が展開しないと判断される位置まで広げて遺構検出作業に移っていった。その結果、規則性を持って配置された掘立柱建物群が5棟検出された。その後、北側の調査に移っていったが、丘陵は北に向かって緩やかに傾斜しており、表土も北に向かうにつれて深くなっていた。そのため、重機の表土除去作業は剥いだ表土の運搬も含めて時間を要することになった。表土除去の後、遺構検出作業を進めていったが、北側では多数の土坑が点在して検出された。以下各遺構ごとに説明を加えることにする。

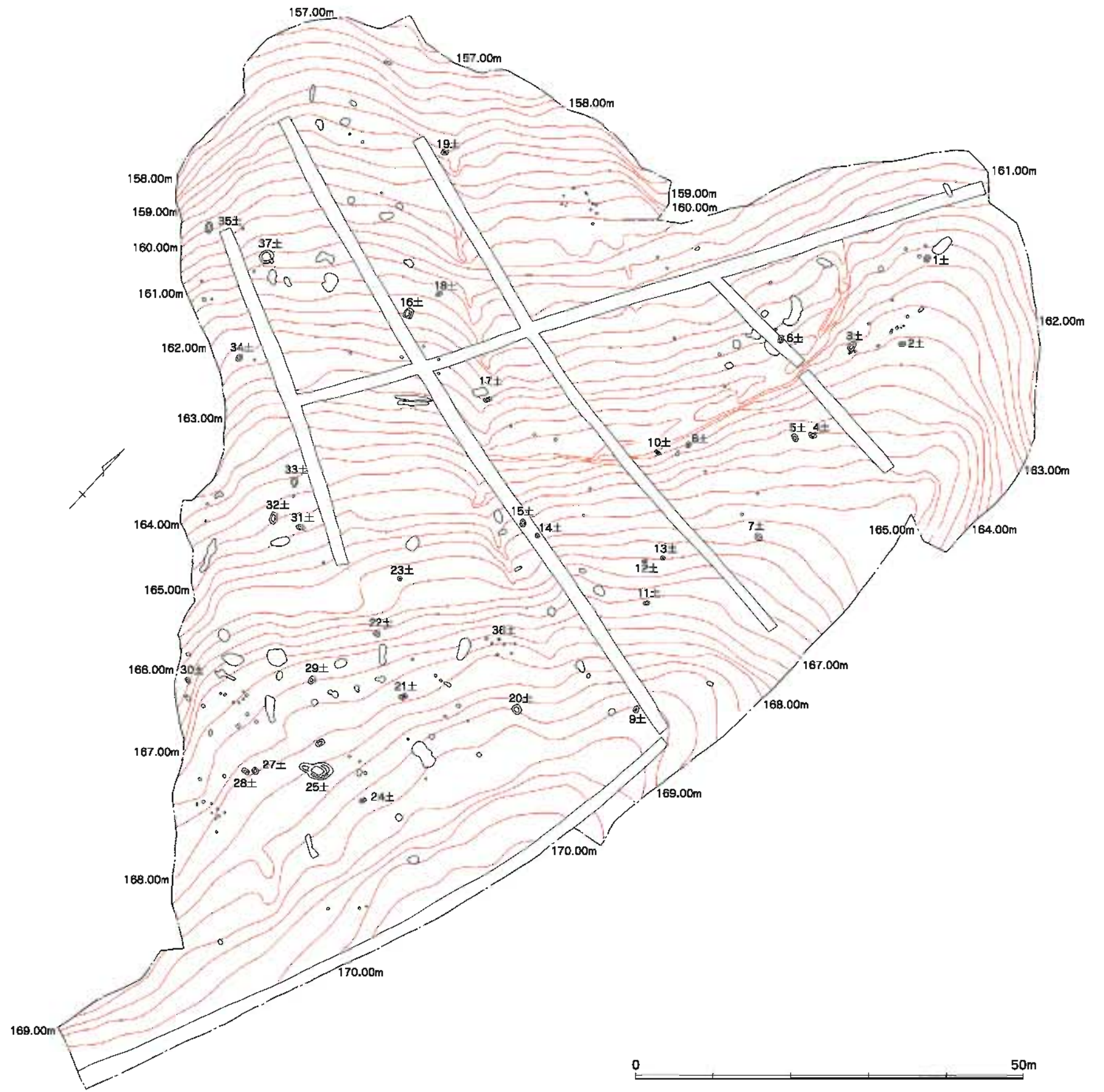
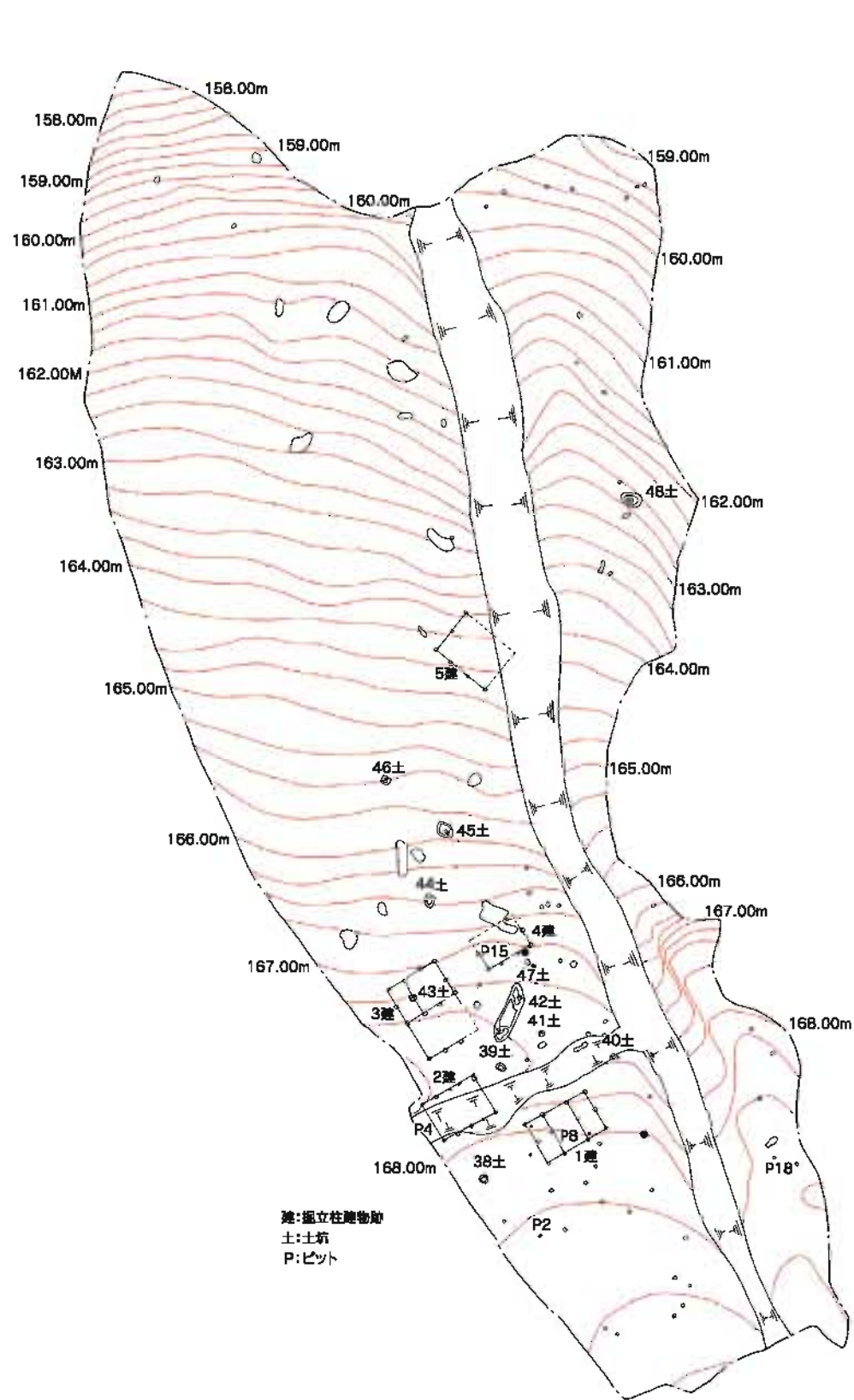
2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物跡(第15図)

掘立柱建物はすべて南側の調査区で検出された。柱穴埋土はいずれも黒褐色ではっきりしていた。建物は全部で5棟検出されたが、1～4号掘立柱建物は建物同士での切り合い関係はなく、また建物軸方向も全体に規則性のある様子が窺われ、同時期に存在していた可能性が高い。また建物のうち柱穴の確認できなかった場所があるが、これはどの建物柱穴も掘り方が浅く、後世の削平により失われたと推測されるため、それらの建物については柱穴の位置を推定して図化している。これらの建物柱穴内からは数点であるが遺物が出土した。



第14図 有田塚ヶ原遺跡位置図(1/4,000)



第15図 有田塚ヶ原遺跡遺構配置図(1/600)

1号掘立柱建物(第16図)

建物群の最も東側で確認された南北棟の総柱建物である。身舎の規模は、梁間2間(約4.0m)、桁行3間(約6.28m)を測り、梁間方向の柱間平均は約2.0m、桁行方向の柱間平均は約2.1mを測る。身舎の延床面積は約25.1㎡で、建物の軸方位はN-15° - Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm~40cmを測り、深さは20cm~60cmとばらつきがある。柱穴の中からは須恵器坏(第26図-2)が出土した。

2号掘立柱建物(第16図)

1号建物の西側で確認された南北棟の建物である。梁間両側の中央の柱穴は確認されなかった。身舎の規模は、梁間1間(約4.1m)、桁行3間(約5.5m)を測り、梁間方向の柱間平均は約4.1m、桁行方向の柱間平均は約1.8mを測る。身舎の延床面積は約22.6㎡で、建物の軸方位はN-15° - Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm~40cmを測り、深さは8cm~50cmとばらつきがある。柱穴の中からは須恵器坏蓋(第26図-1)が出土した。

3号掘立柱建物(第17図)

2号建物西側で確認された南北棟の建物である。身舎の規模は、梁間2間(約3.8m)、桁行3間(約5.2m)を測り、梁間方向の柱間平均は約1.9m、桁行方向の柱間平均は約1.7mを測る。身舎の延床面積は約19.8㎡で、建物の軸方位はN-15° - Eである。建物中央より南側には焼土が多く入った土坑(43号土坑)が確認されたが、この建物に付随するものかどうかは不明である。この建物東側には、建物梁間の距離とほぼ同じ距離で建物の桁方向と併行して並んだ柱穴列が確認された。当初別の建物跡または柵列跡と考えていたが、柱穴列に伴う向かいの桁の柱穴列が確認されなかったことからこの柱穴列までで1棟の建物であった可能性もあるため、合わせて図化している。これらの柱穴の検出面での掘り方の大きさは35cm~50cmを測り、深さは6cm~45cmとばらつきがある。柱穴の中から遺物は出土しなかった。

4号掘立柱建物(第17図)

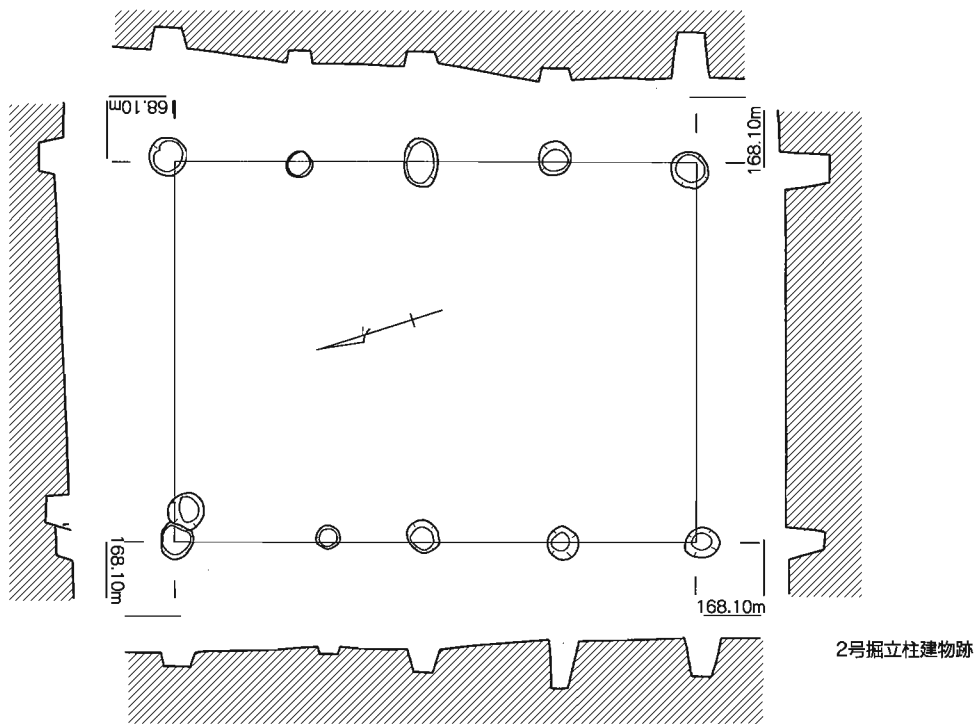
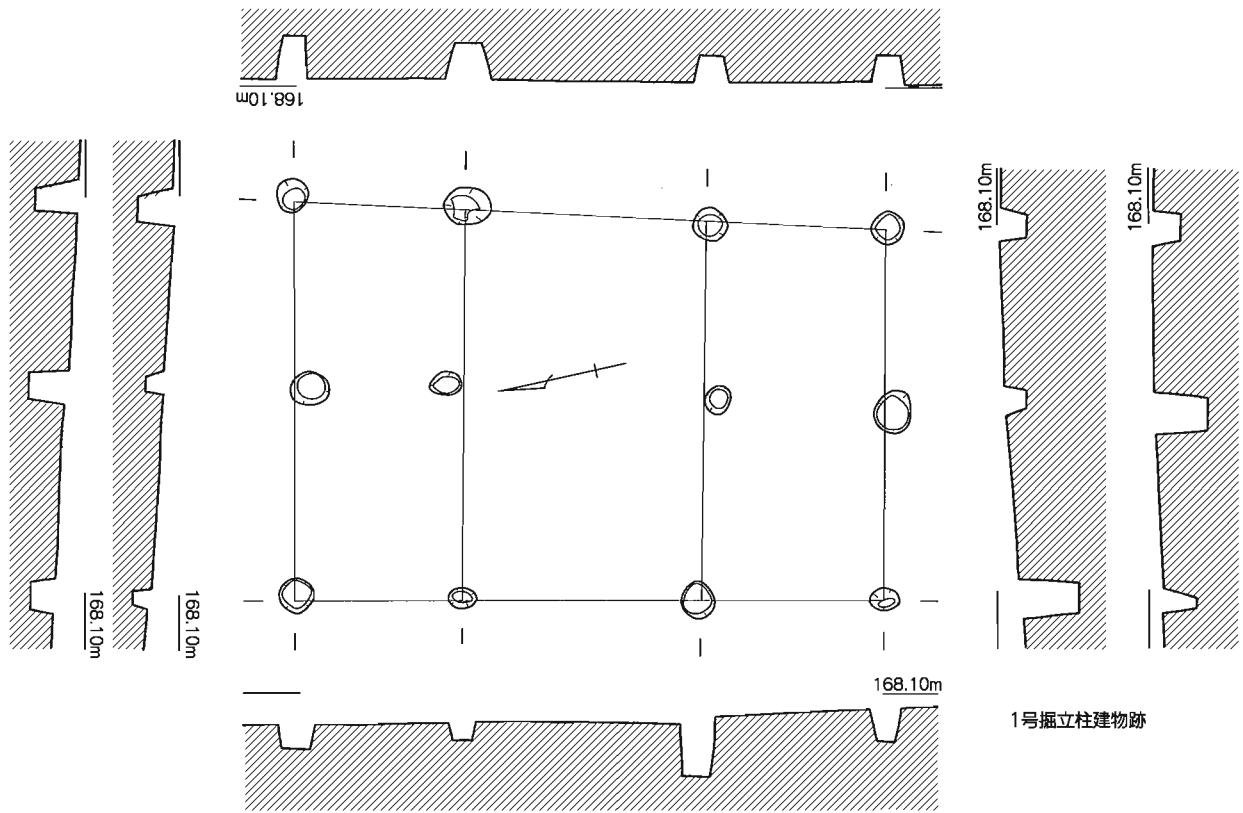
3号建物の北側で3号と南北に並行して確認された南北棟の建物である。建物西側の柱列は残っていなかったものの梁間の中央柱穴が南北とも残っていたことから、建物西側の柱穴は削平を受けたものと推測される。梁間は推定で2間(約3.6m)、桁行は3間(約4.8m)を測る。梁間方向の柱間平均は約1.8m、東側桁行方向の柱間平均は約1.6mを測る。推定で身舎の延床面積は約17.3㎡、建物の軸方位はN-15° - Eである。これらの柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm~40cmを測り、深さは10cm~35cmとばらつきがある。柱穴の中からは須恵器甕(第24図-3)が出土した。

5号掘立柱建物(第18図)

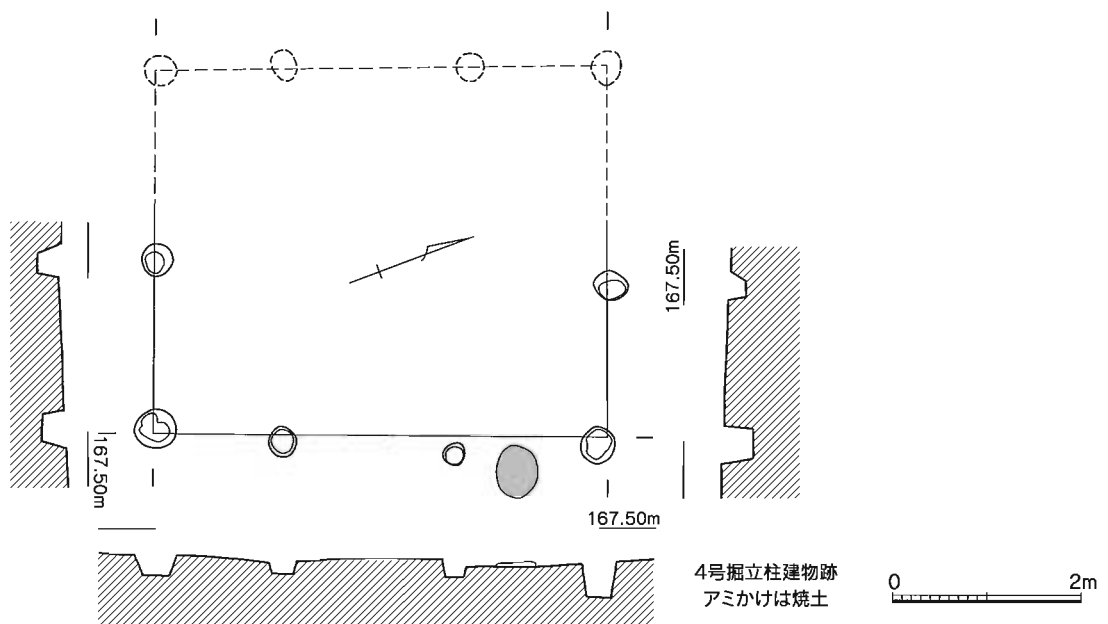
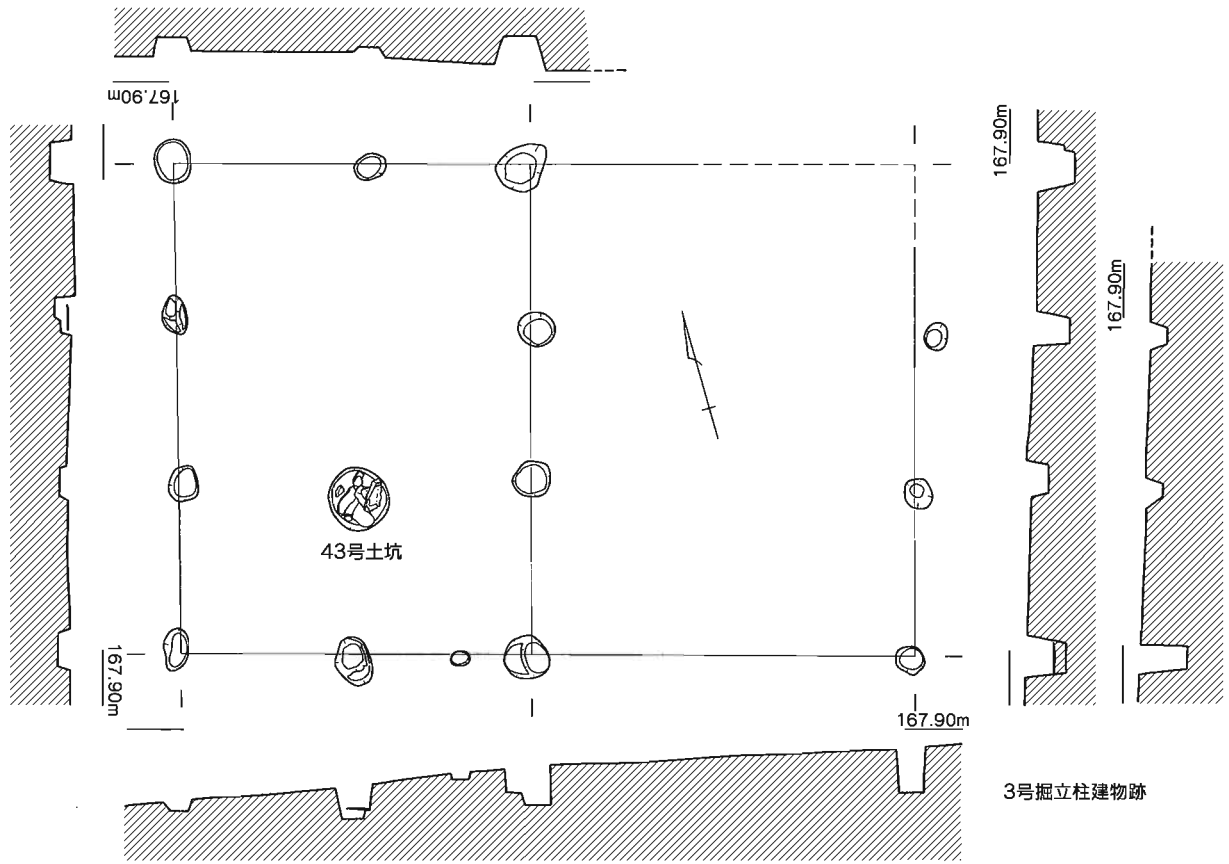
1~4号建物からやや離れて確認された東西棟の建物である。建物北側の梁と桁部分は削平を受けており、残った柱穴で規模を推測すると、梁間は推定で2間(約4.4m)、桁行は3間(約6.0m)を測る。梁間方向の柱間平均は約2.2m、桁行方向の柱間平均は約2.0mを測る。推定で身舎の延床面積は約26.4㎡、建物の軸方位はN-2° - Wである。これらの柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm~35cmを測り、深さは10cm~40cmとばらつきがある。柱穴の中から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡出土遺物(第26図)

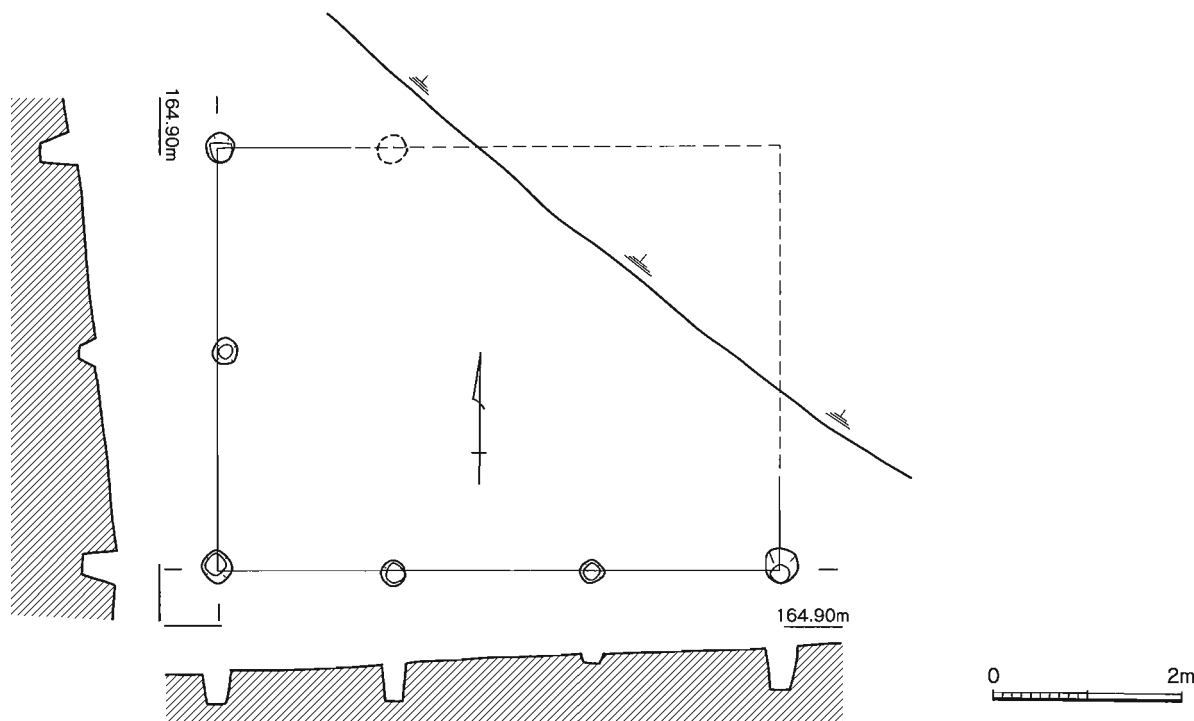
1は2号建物柱穴から出土した須恵器坏蓋である。端部は鳥嘴状を呈する。2は1号建物柱穴から出土した高台付の須恵器坏身底部である。3は4号建物柱穴から出土した須恵器甕胴部である。



第16图 1·2号掘立柱建物跡实测图(1/80)



第17図 3・4号掘立柱建物跡実測図(1/80)



第18図 5号掘立柱建物跡実測図(1/80)

2) 土坑(第15図)

土坑は調査区北部を中心に点々と確認された。その多くは不定形のプランをしており風倒木痕と思われる。また、底面に杭状のピットを持つものや深くしっかりした掘り方を持つものもあり、これらは落とし穴遺構と推測される。以下各遺構ごとに説明を加える。

1号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.9mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約1.1mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面にはピットが1ヶ所検出された。ピットの幅約15cm、深さ約30cmを測る。土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

2号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.8m、短軸約0.5mを測る隅丸方形プランを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からはピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

3号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約2.2m、短軸約1.3mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約80cmを測る。壁面は斜め方向に階段状に立ち上がる。土坑の形態から風倒木痕と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

4号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約1.1mを測るやや歪な方形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からはピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構の可能性

が高いと推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

5号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約0.9mを測る隅丸方形プランを呈し、底面までの深さは約1.0mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からはピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

6号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.4m、短軸約0.9mを測る隅丸方形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は壁側に向かって若干傾斜している。底面中央付近には幅約15cm、深さ約7cm～15cmのピットが3個検出された。土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

7号土坑(第19図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.9mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約1.2mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からはピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

8号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約1.0mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面は斜め方向に立ち上がる。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

9号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.4m、短軸約1.0mを測るやや歪な楕円形プランを呈し、底面までの深さは約1.7mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からはピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

10号土坑(第20図)

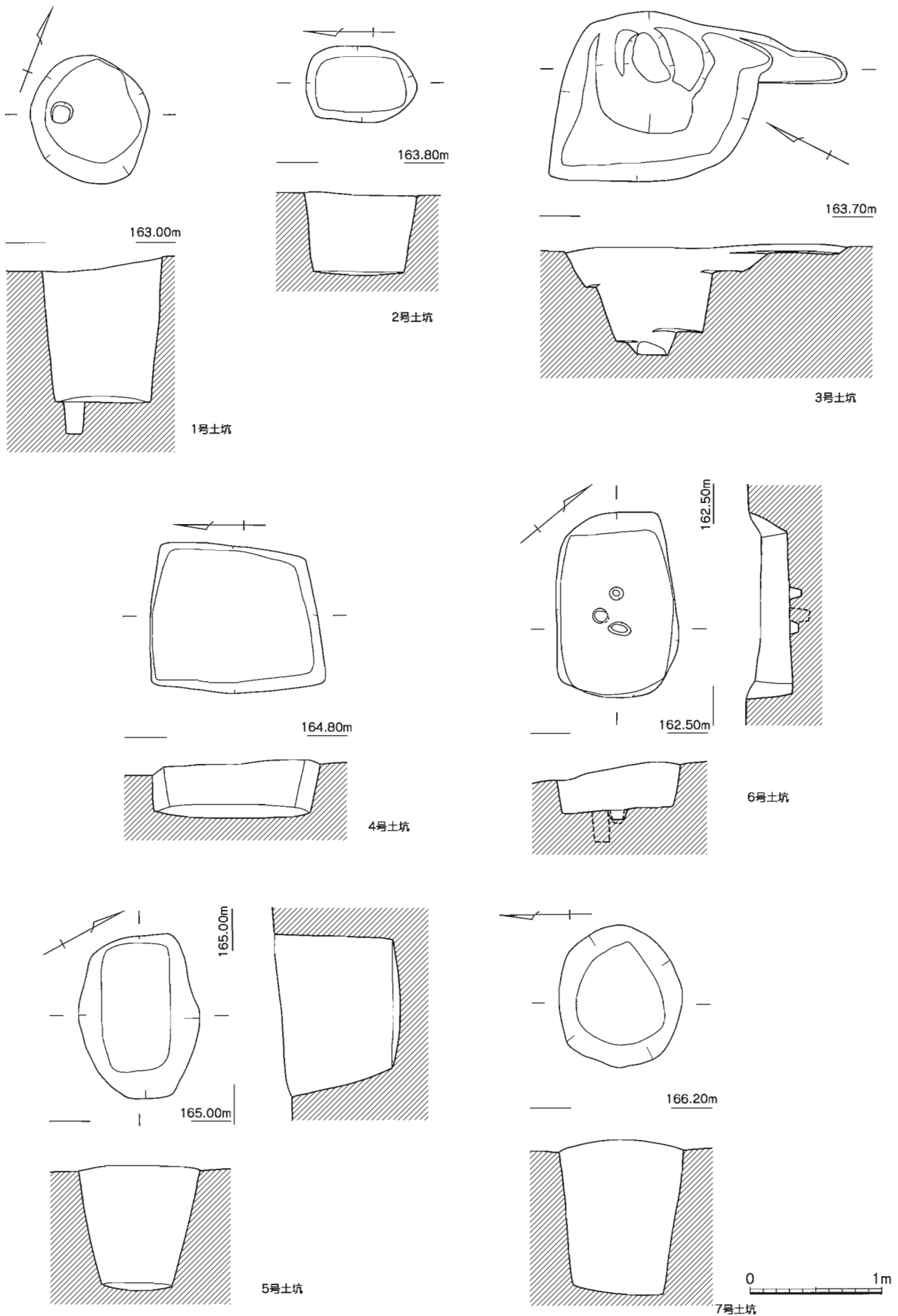
調査区北部で確認された。遺構南側はすでに削平を受けていた。検出面での規模は、長軸約1.0m + α 、短軸約0.6mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

11号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約1.0mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや皿状となっている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

12号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.7mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面はやや斜め方向に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。



第19图 1~7号土坑实测图 (1/40)

13号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.8m、短軸約0.5mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

14号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.8m、短軸約0.6mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は段差が見られる。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

15号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約0.6mを測るやや歪な隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

16号土坑(第20図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約2.0m、短軸約1.4mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約1.5mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

17号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約0.9mを測るやや歪な隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

18号土坑(第21図)

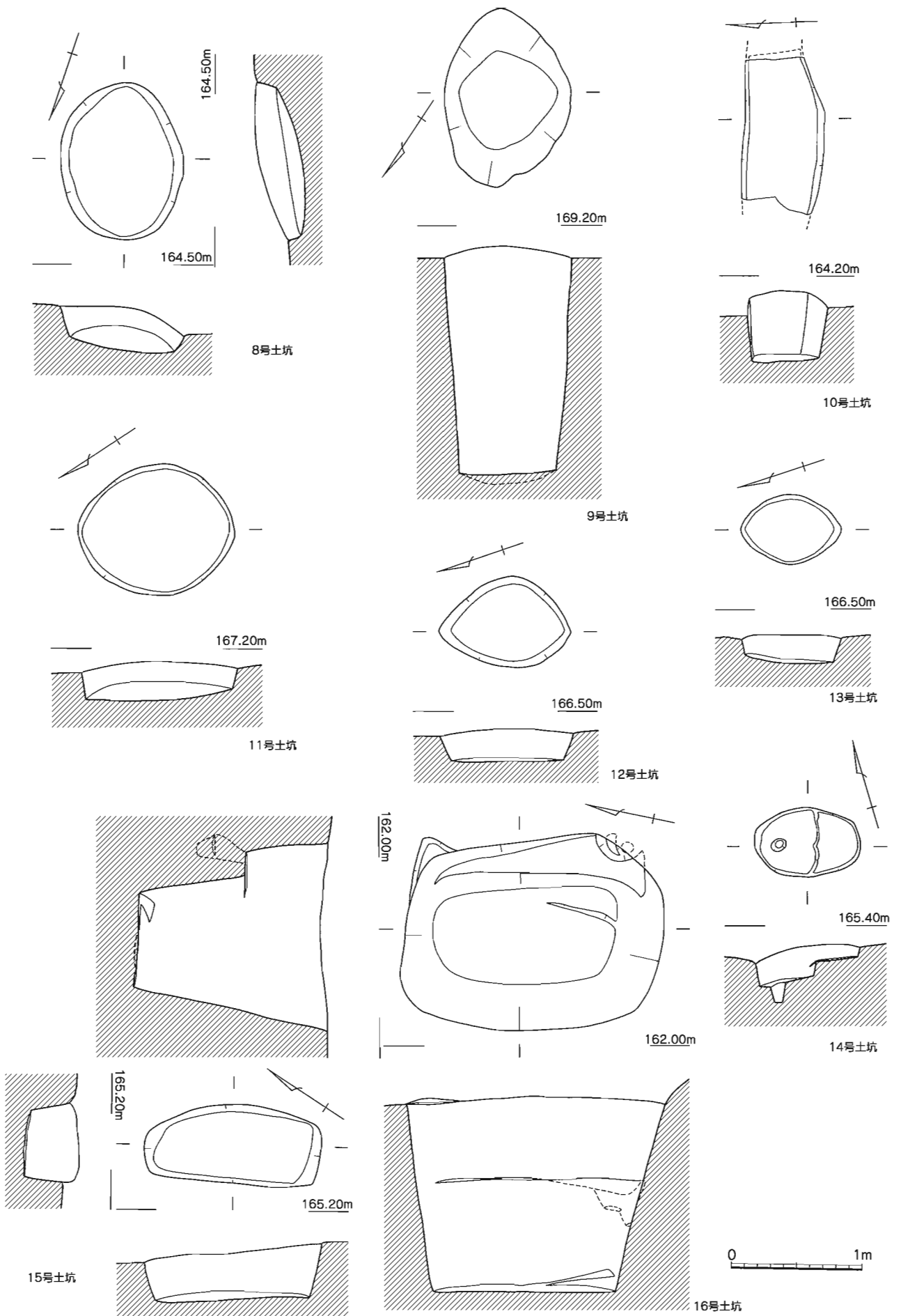
調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.9mを測る隅丸方形プランを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

19号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.7mを測る長方形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

20号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.6m、短軸約1.5mを測る歪な円形プランを呈し、底面までの深さは約1.3mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや皿状を呈している。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは石器(第26図-13)が出土している。



第20图 8~16号土坑实测图 (1/40)

21号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約0.6mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面には段差が見られる。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

22号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.6mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は片方にやや傾斜が見られる。底面中央には幅約15cm、深さ約10cmのピットが見られ、形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

23号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.7m、短軸約0.7mを測るほぼ円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

24号土坑(第21図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約0.7mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約50cmを測る。壁面は斜め方向に立ち上がり、底面はやや傾いている。土坑の形態から風倒木痕と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

25号土坑(第22図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約4.6m、短軸約2.5mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面は斜めに立ち上がる。底面は皿状を呈している。形態から風倒木痕と推測される。この中からは土器片(第26図-4・5など)が出土した。

26号土坑(第22図)

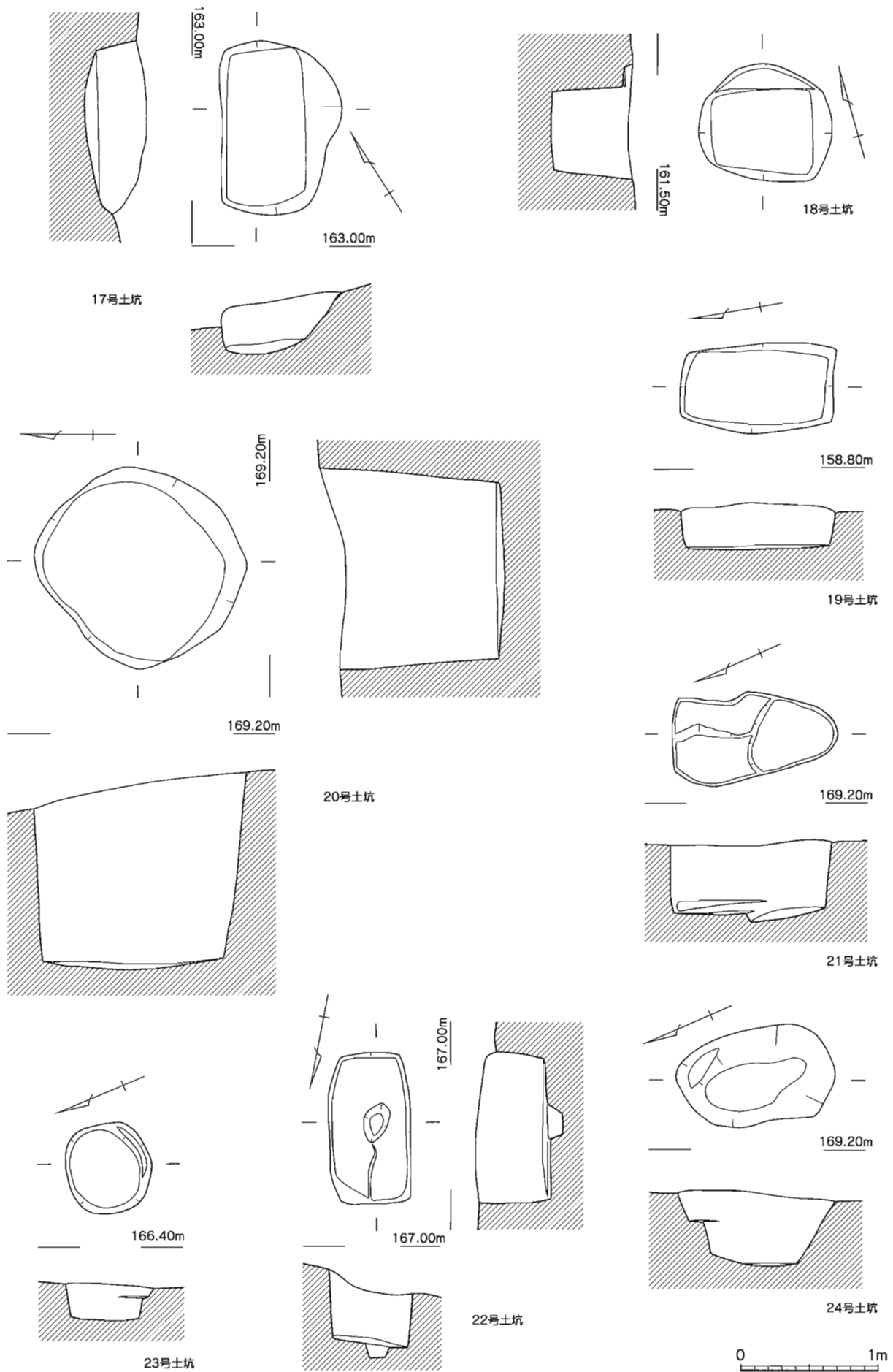
調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.5m、短軸約0.8mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面には5個の小さなピットが検出された。ピットの大きさは大きいもので幅約15cm、深さ約15cmを測る。形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

27号土坑(第22図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸1.0m、短軸0.9mを測る歪な円形プランを呈し、底面までの深さは約1.0mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや皿状を呈している。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

28号土坑(第22図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約0.8mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。



第21图 17~24号土坑实测图 (1/40)

29号土坑(第22図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.8mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約80cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

30号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約0.7mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや一方に傾いている。底面中央付近には2個のピットが検出された。ピットの大きさは幅約15cm、深さ約10cmを測る。形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

31号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約1.0mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約1.1mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

32号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸1.7m、短軸1.2mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや一方に傾いている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

33号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.6m、短軸約0.6mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は一方に傾いている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

34号土坑(第23図)

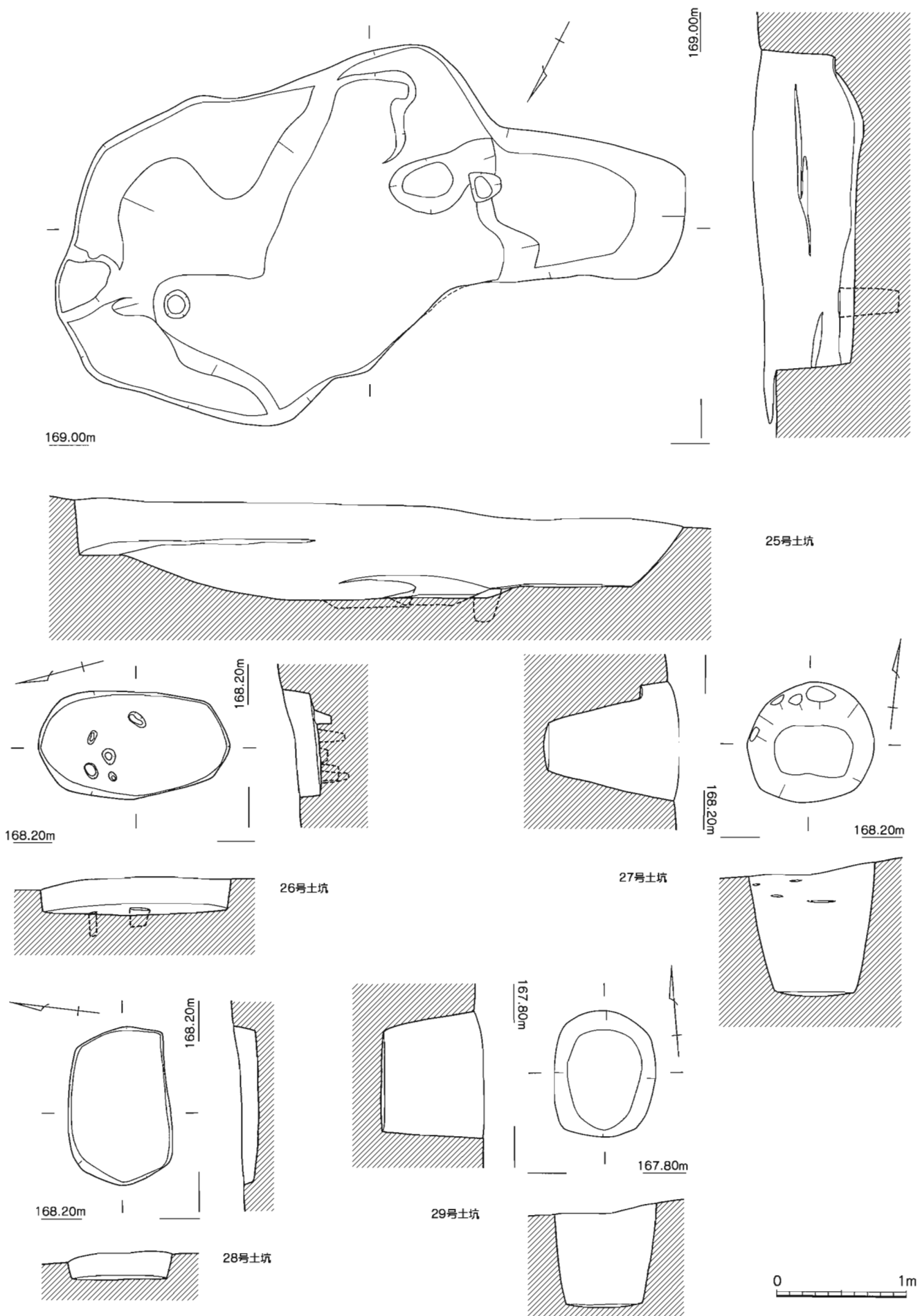
調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約0.8mを測るやや歪な楕円形プランを呈し、底面までの深さは約90cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

35号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.6m、短軸約0.7mを測るやや歪な楕円形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は一方に傾いている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

36号土坑(第23図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.8mを測る歪な方形プランを呈し、底面までの深さは約60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に



第22图 25~29号土坑实测图 (1/40)

整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

37号土坑(第24図)

調査区北部で確認された。検出面での規模は、長軸約2.6m、短軸約2.2mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや傾いている。形態から風倒木痕と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

38号土坑(第24図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.7mを測る長方形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

39号土坑(第24図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.7mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面中央よりやや東側で深さ約20cmを測るピットが検出されている。形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは石鏃未製品(第26図-8)が出土している。

40号土坑(第24図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.0m、短軸約0.6mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約1.0mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

41号土坑(第24図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.7m、短軸約0.6mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや皿状を呈する。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

42号土坑(第24図)

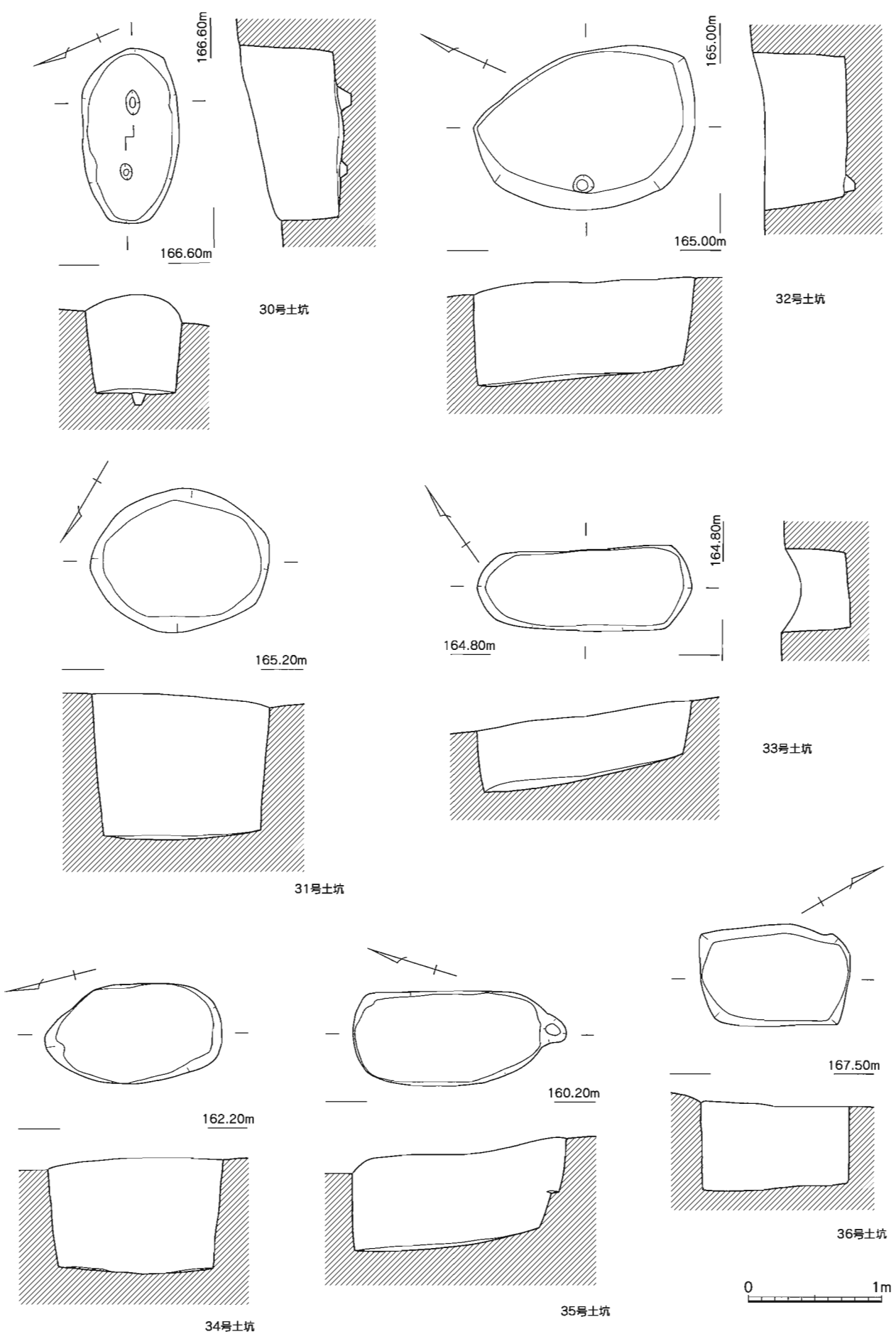
調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約5.6m、短軸約1.7mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約80cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は段差が多い。形態から風倒木痕と推測される。この中からは石器(第26図-11・12)が出土している。

43号土坑(第25図)

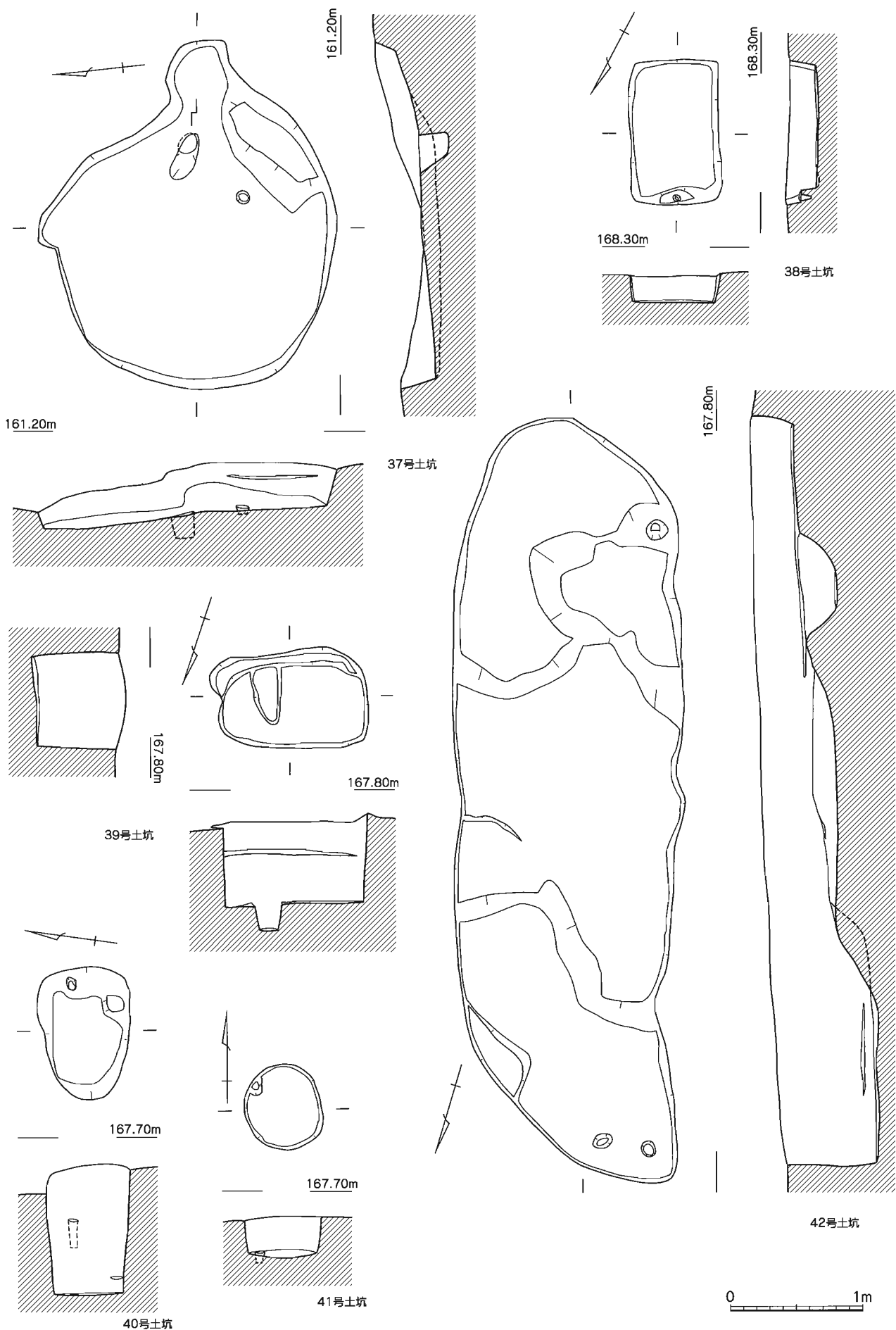
調査区南部、3号掘立柱建物の内部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.7m、短軸約0.6mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。土坑内には大小の礫が入っていた。その位置から、3号掘立柱建物に付随する施設であると考えられる。

44号土坑(第25図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約1.0mを測る隅丸長方形プランを呈し、途中段差がある。底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや傾いている。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。



第23图 30~36号土坑实测图 (1/40)



第24图 37~42号土坑实测图 (1/40)

45号土坑(第25図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.4m、短軸約1.3mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。形態から風倒木痕と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

46号土坑(第25図)

調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.2m、短軸約0.8mを測る隅丸方形プランを呈し、底面までの深さは約70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は比較的平坦に整えている。底面からピットは確認されなかったが、土坑の形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

47号土坑(第25図)

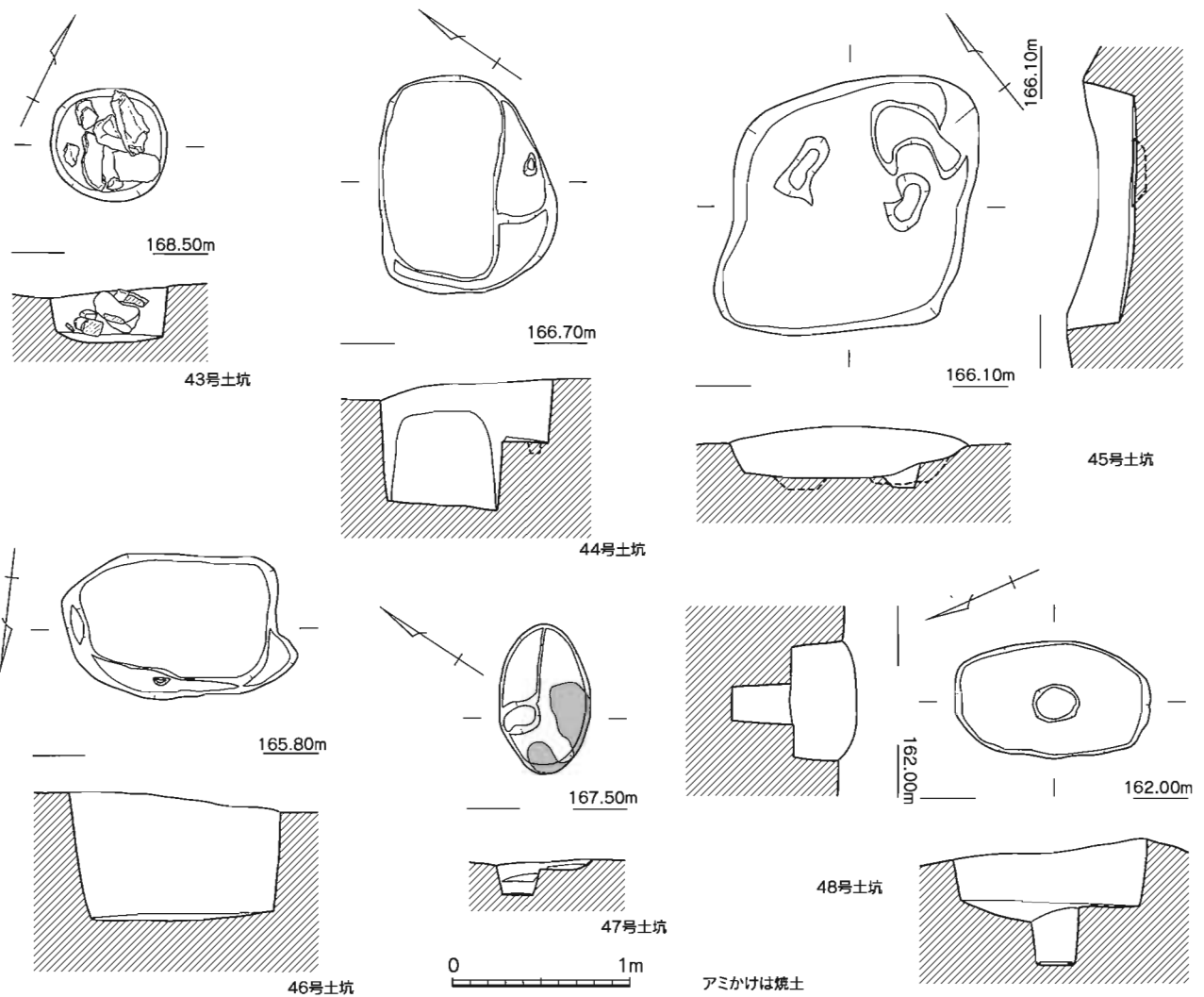
調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約0.8m、短軸約0.5mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。中からは焼土塊等が検出された。底面は凹凸が多く、風倒木痕と推測される。この中からは遺物の出土はなかった。

48号土坑(第25図)

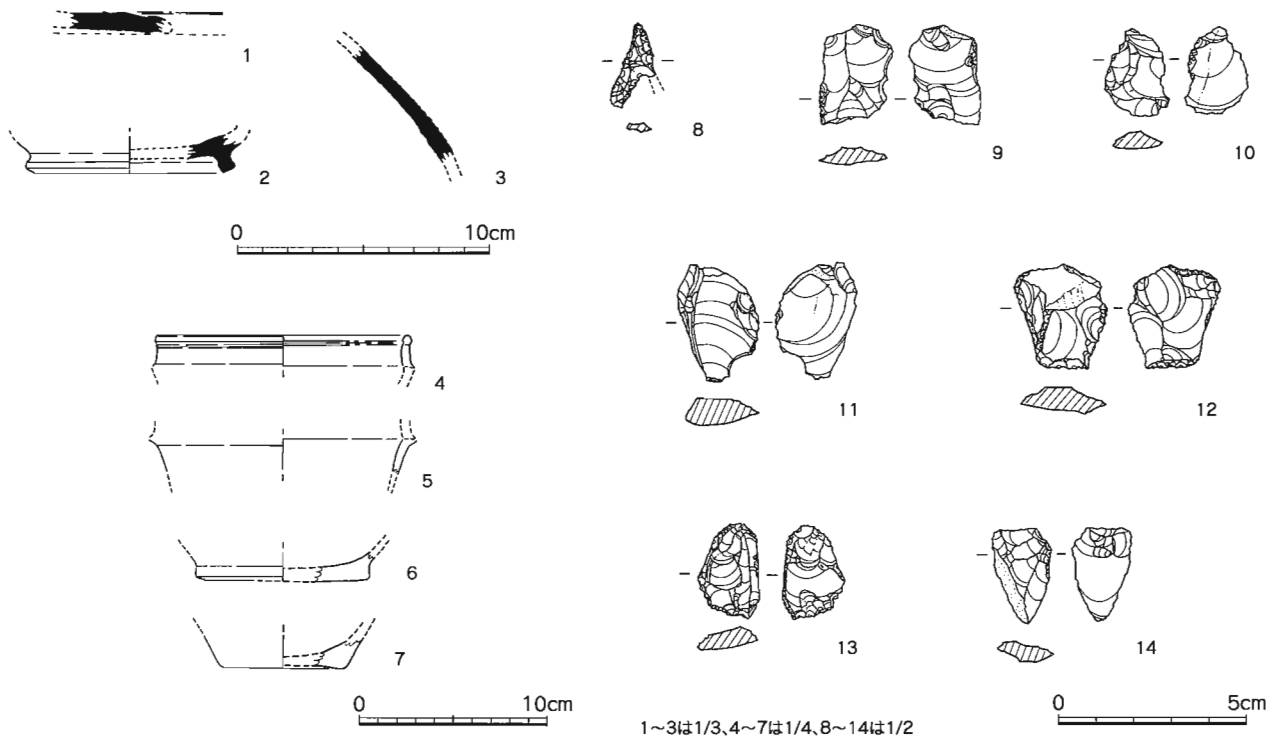
調査区南部で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.7mを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央に向かって傾いている。底面中央から幅約25cm、深さ約30cmのピットが検出された。形態から落とし穴遺構と推測される。この中からは数点土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

土坑・調査区出土遺物(第26図)

4は25号土坑から出土した鉢である。胴部から一端内側に向かい、口縁部へ向かって外反する。5は同じく25号土坑から出土し、4と同一個体と思われる鉢の胴部片である。6・7は調査区から出土した鉢底部片である。6はややレンズ底を呈し、7は上げ底状を呈する。8は石鏃である。翼部片側を欠損する。黒曜石製。全長2.3cm、重量0.4gを測る。9～14は2次加工剥片である。9はピット2から出土した。最大長2.6cm、重量2.4gを測る。黒曜石製。10はピット18から出土した。最大長2.3cm、重量1.4gを測る。黒曜石製。11は42号土坑から出土した。最大長3.1cm、重量4.1gを測る。黒曜石製。12も42号土坑から出土した。最大長2.7cm、重量5.1gを測る。チャート製。13は20号土坑から出土した。最大長2.5cm、重量2.5gを測る。黒曜石製。14は調査区から出土した。最大長2.4cm、重量1.6gを測る。黒曜石製。



第25図 43~48号土坑実測図 (1/40)



第26図 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

第3節 調査のまとめ

1. 掘立柱建物跡の時期と性格について

遺構は、調査区南側から掘立柱建物跡が5棟、調査区北側及び南側から48基の土坑が検出された。これらの遺構のうち、1・2・4号建物柱穴からはそれぞれ1点ずつ須恵器が出土した。2号建物柱穴から出土した坏蓋は、やや退化した鳥嘴状口縁を呈し、また1号建物柱穴から出土した高台付坏身もしっかりしているが、高台貼り付け部分が底端部に近く、これらの特徴からいずれも8世紀後半代と推測される。

これらの建物は、切り合い関係もなく、軸方向も5号を除いてほぼ統一されており、同時期に存在した可能性が考えられる。こうした配置が行なわれるのは古代建物の特徴の一つであり、日田市小迫辻原遺跡K区^(註1)や上野第1遺跡^(註2)で整然と配置された建物群が確認されているほか、眼下に見下ろせる石ヶ迫遺跡B地区^(註3)でも谷筋に並んだ掘立柱建物跡が報告されている。上野第1遺跡では、「豊馬豊馬」と線刻された分胴型の石製品が出土し、古代石井郷に設置された駅とも推測されている。また、もう一つの解釈として、駅に関連して馬を放牧していた牧の可能性も指摘されている。本遺跡は、直接駅とは関連性はないと思われるが、広い丘陵を利用した牧としての施設であった可能性も推測される場所である。

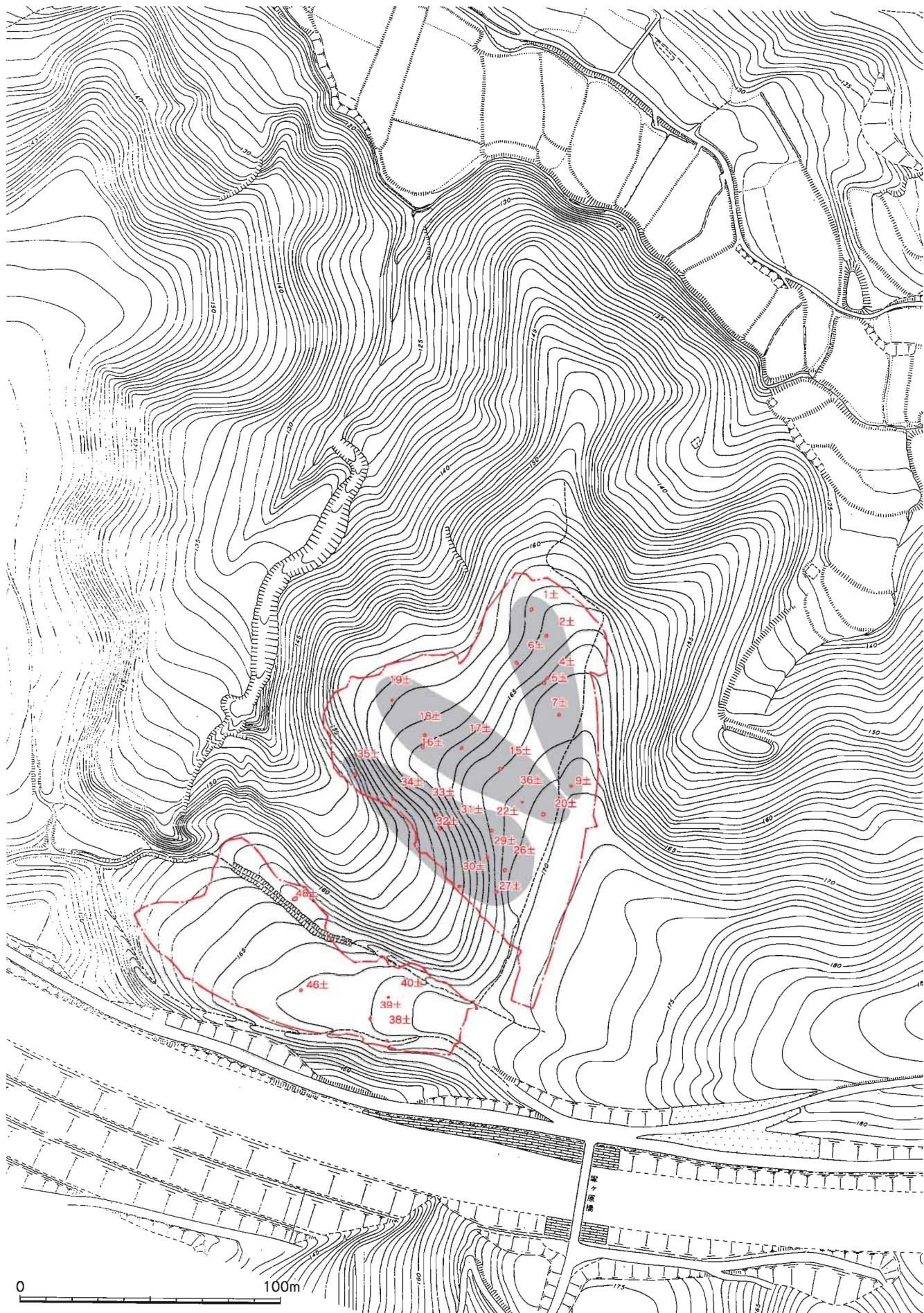
2. 土坑の時期と性格について

遺構は調査区全体で48基確認された。このうち数基の土坑からは土器の小破片が出土したが、遺構の時期の特定が可能な遺物が出土したのは25号土坑のみである。この土坑からは同一個体と見られる深鉢の破片が2点出土した。口縁端部は丸く仕上げ、すぐ下に凹線を施し、逆「く」の字に屈曲する胴部を呈する。土器の形から縄文時代晩期初頭～前半と推測される。

これらの土坑群のうち、掘り方が楕円形あるいは長方形を呈し、床面の小穴の有無を問わず深さが深く直立に近い壁をもつことから落とし穴状遺構と判断される遺構が全体で29基確認された。その分布を示したものが第27図である。この図を見るとわかるように尾根筋またはやや谷状となっている場所に点々と分布しているが、実際にはある程度の間隔を保って並んでいる様子がうかがえる。さらにこれらの並びは分布状況から大きく3つの群として見る事ができる。これらの群の中で落とし穴のタイプについてはとくに規則性はないようである。この落とし穴の並びについては、高橋氏によりすでに指摘されており、遺跡西部の谷部にある尾漕遺跡4次調査区^(註4)においても4基の落とし穴遺構の並びが確認されている。今回の調査では、こうした並びが丘陵上に広い範囲で規則性を持って展開していることを捉えることができた。

註)

- 1) 行時志郎他編『小迫辻原遺跡発掘調査概報』 日田市教育委員会 1991
- 2) 田中祐介編『日田市高瀬遺跡群の調査3 上野第1遺跡』 大分県教育委員会 2001
- 3) 行時桂子編『石ヶ迫遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
- 4) 高橋信武「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』 熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集 龍田考古会 1994
高橋信武「九州の陥し穴」『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』 九州縄文研究会・南九州縄文研究会2004
- 5) 行時志郎編『尾漕遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001



第27図 落とし穴遺構分布図(1/2,000)

第7表 有田塚ヶ原遺跡出土土器観察表

挿入番号	種別	器種	遺構名	法 量				調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考
				口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面			外 面	内 面	
第24図-1	須恵器	坏蓋	P-4	-	-	-	(0.8)	黒ヨナダ	黒ヨナダ	BC	良 好	暗灰白色	暗灰白色	
第24図-2	須恵器	坏	P-8	-	-	(7.4)	(1.4)	黒ヨナダ	黒ヨナダ	B	良 好	暗青灰色	暗青灰色	
第24図-3	須恵器	壺	P-15	-	-	-	(6.0)	黒ヨナダ	黒ヨナダ	BE	良 好	青灰色	青灰色	
第24図-4	縄文土器	鉢	25号土坑	(13.6)	-	-	(1.2)	ナ デ	ナ デ	ABCD	良 好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第24図-5	縄文土器	鉢	25号土坑	-	-	-	(1.9)	不 明	不 明	ABCD	不 良	暗茶褐色	暗茶褐色	6と同一か?
第24図-6	縄文土器	深鉢	表 探	-	-	(9.2)	(1.6)	不 明	不 明	ABC	不 良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第24図-7	縄文土器	深鉢	表 探	-	-	(6.4)	(1.7)	不 明	不 明	ABC	不 良	暗茶褐色	暗茶褐色	

※単位はcm。()は現存長。
胎土…A:角閃石 B:石英 C:長石 D:赤色粒子 E:白色粒子 F:黒色粒子 G:雲母 H:砂粒

第8表 有田塚ヶ原遺跡出土石器観察表

挿入番号	器 種	遺 構 名	法 量				石 材	備 考
			長さ	最大幅	厚さ	重さ(g)		
第24図-8	石 鎌 未 製 品	39号土坑	2.3	(1.1)	0.2	0.4	黒 曜 石	半 欠
第24図-9	2 次 加 工 剥 片	P-2	2.6	1.9	0.4	2.4	黒 曜 石 (腰 岳 ?)	
第24図-10	2 次 加 工 剥 片	P-18	2.3	1.6	0.5	1.4	黒 曜 石	
第24図-11	2 次 加 工 剥 片	42号土坑	3.1	2.1	0.7	4.1	黒 曜 石	
第24図-12	2 次 加 工 剥 片	42号土坑	2.7	2.5	0.7	5.1	チ ャ ー ト	
第24図-13	2 次 加 工 剥 片	20号土坑	2.5	1.6	0.4	2.5	黒 曜 石	
第24図-14	2 次 加 工 剥 片	表探	2.4	1.5	0.5	1.6	黒 曜 石 (姫 島)	

※単位はcm。()は現存長・重。



全景



北側全景

写真図版6



南側全景



建物群全景



1号土坑



2号土坑



3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



7号土坑



8号土坑

写真图版8



9号土坑



10号土坑



11号土坑



12号土坑



13号土坑



14号土坑



15号土坑



16号土坑



17号土坑



18号土坑



19号土坑



20号土坑



21号土坑



22号土坑



23号土坑



24号土坑

写真图版10



25号土坑



26号土坑



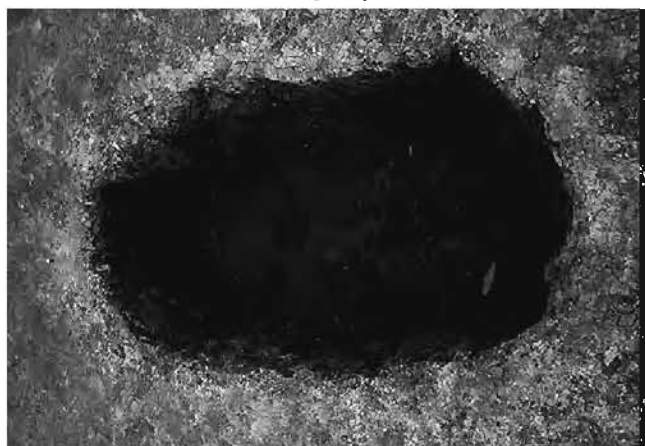
27号土坑



28号土坑



29号土坑



30号土坑



31号土坑



32号土坑



33号土坑



34号土坑



35号土坑



37号土坑



38号土坑



39号土坑



40号土坑



41号土坑

写真图版12



43号土坑



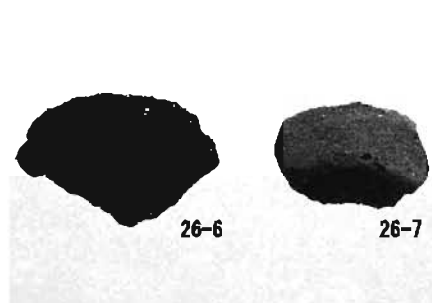
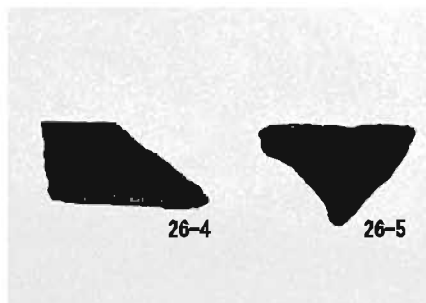
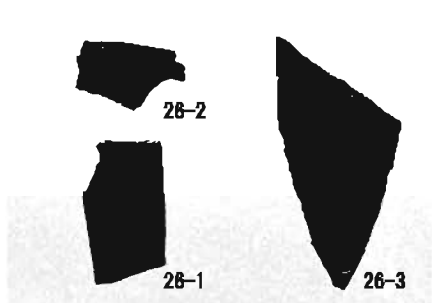
44号土坑



46号土坑



48号土坑



ふりがな	くびりいせき／ありたつかがはらいせき
書名	クビリ遺跡／有田塚ヶ原遺跡
副書名	ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	58
編著者名	行時 桂子
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2005年3月31日（平成17年3月31日）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		地町村	遺跡番号					
クビリ遺跡	大分県日田市 大字東有田字 クビリ	44204-6	651220	33°19'30"	130°58'08"	19960111 ～19960328	1,500㎡	ウッド コンビ ナート 建設
有田塚ヶ原遺跡	大分県日田市 大字東有田字 塚ヶ原	44204-6	651221	33°19'25"	130°58'11"	19960215 ～19960328	13,000㎡	ウッド コンビ ナート 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
クビリ遺跡	集落跡	古代 中世	溝2条、柱穴群、包含層	須恵器、土師器、 陶磁器、土錘、鉄器、 石製品	
有田塚ヶ原遺跡	集落跡	縄文 古代	落とし穴遺構、掘立柱建物跡	縄文土器、石器、 須恵器、土師器	

クビリ遺跡 有田塚ヶ原遺跡

2005年3月31日

編集 日田市教育委員会
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 山本印刷有限公司
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3